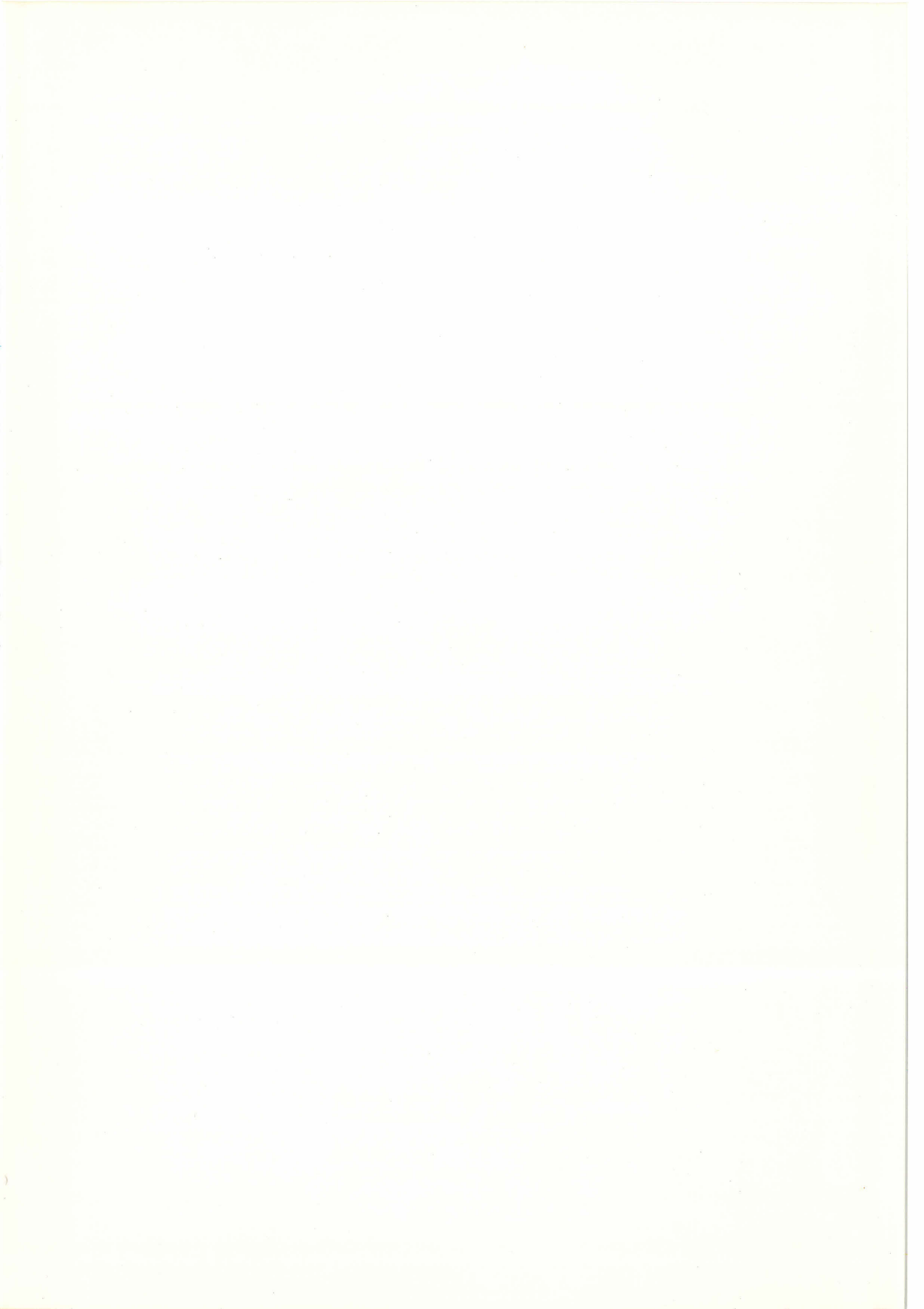


福井県美浜町埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年度興道廃寺範囲確認 試掘調査報告書

1 9 9 9

美浜町教育委員会



序

私達のふるさと、美浜町には国吉城址、興道寺窯跡、獅子塚古墳など多くの遺跡が存在しています。

今回は範囲確認を目的として、興道廃寺の試掘調査を実施いたしました。古代寺院の痕跡は確認されませんでした。本調査により6世紀の集落跡の一部が確認されました。この時期の集落遺跡の調査は町内では初めてのことです。

私達は、古代の美浜の地を生活の拠点とした先人の文化的遺産を諸開発から保護し、次の世代に伝えてゆく責務をもっています。この意味から、町教育委員会では開発関係機関各位との連絡、調整を密にし、文化財保護に取り組んでおります。

本報告が美浜町の歴史を探究するとともに、埋蔵文化財についてのより一層の理解、認識を深め、文化財愛護、郷土愛の啓発、および普及につながり、また広く調査研究に活用されることを切望いたします。

なお、現地調査の実施、及び本報告の刊行におきまして、暖かく調査を御指導下さった諸先生方、地権者の方々と興道寺区の皆様、調査に従事されました学生、作業員の方々、並びに関係機関、関係者各位の深い御理解、御協力に対しまして心より御礼申し上げます。

私達は心のふるさと、美浜の自然と歴史、文化を大切に守ってゆきたいと願っております。今後とも、なお一層の御支援、御指導をお願い申し上げます。

平成11年3月

美浜町教育委員会

教育長 西野 喜代二

例言

- 1 本書は範囲確認を目的として美浜町教育委員会が実施した美浜町興道寺小字観音・湊ノ上他に存在が推定されている興道廃寺の試掘調査報告書である。
- 2 調査は平成10年8月16日から同9月3日まで現地調査を行い、平成10年9月4日から平成11年3月31日までの期間を整理作業、報告書刊行に費やした。
- 3 調査組織は下記のとおりである。

調査主体者	西野喜代二（美浜町教育委員会教育長）
調査指導	仁科 章（福井県教育庁文化課文化財保護室長） 山口 充（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所長） 水野 和雄（福井県立若狭歴史民俗資料館副館長） 久保 智康（京都国立博物館京都文化資料研究センター主任研究官）
事務局	熊谷 純成（美浜町教育委員会事務局長）
調査担当	松葉 竜司（美浜町教育委員会事務局文化財保護担当職員）
調査技術員	上田 智也（奈良大学卒業生）
調査補助員	

相馬裕介（関西外国語大学学生）、加藤孝、藤田穂高、森川和彦（以上、奈良大学学生）、小谷紗代、鹿谷亜由美、沢見晶子（以上、同志社大学学生）、熊谷賢成（新潟大学学生）、二村陽子、森永美穂、松田教世、納所瞳（以上、敦賀短期大学学生）

作業員

久保正（興道寺区）、秋山喜久枝（佐野区）、田村正美（金山区）、村田きよ、阿部昭三、高木弥一、綿田さだ江、梅田利、武長輝江、伊藤和子、楠辰雄、杉木隆、山口久幸、中野純一（以上、美浜町シルバー人材センター）

- 4 本書の執筆は松葉、上田が分担して行った。目次末尾に執筆担当者を記している。本書の編集は松葉が行った。
- 5 現地調査における各調査区の遺構平面図、断面図等の作成は松葉、上田の指導のもとに加藤、藤田、森川、小谷、鹿谷、沢見、熊谷が中心となって行った。遺構図の整理、調整は上田が行った。
- 6 遺構写真撮影は松葉が、遺物写真撮影は松葉、上田が行った。
- 7 本試掘調査に並行して興道廃寺推定地周辺の遺物分布調査、地形環境調査を調査補助員の協力のもとに上田が中心となって行った。
- 8 出土遺物の整理、復元は松葉の指導のもとに調査補助員が行った。遺物実測は大部分を松葉が行った他、納所も加わった。実測トレース図は松葉、二村、森永、松田、納所が行った。
- 9 現地調査、及び報告書作成の過程において下記の方々及び機関にご指導、ご協力を賜った。

深く感謝する次第である。(敬称略、順不同)

福井県嶺南振興局二州農林部農村整備課、美浜町建設課、美浜町社会課、興道寺区、福井県教育庁文化課、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史民俗資料館、三方町立郷土資料館、福井県立三方青年の家

森川昌和(中京女子大学)、山中章(三重大学人文学部)、泉拓良、植野浩三(以上、奈良大学文学部)、網谷克彦(敦賀短期大学)、山崎晴雄(東京都立大学大学院)、赤澤徳明、河村健史(以上、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、入江文敏(福井県立若狭高等学校)、中原義史(福井県立博物館)、畠中清隆(福井県立若狭歴史民俗資料館)、川村俊彦(敦賀市教育委員会)、田辺常博、青池晴彦(以上、三方町立郷土資料館)、服部修一、大同芳男、武長篤行、中西昭二、森川治(以上、美浜町文化財保護委員)、瀬戸慎一、今井健二(以上、美浜町建設課)、井上ハルミ、西野宏司、西野弥太郎、杉谷正義、鳥居秀樹、馬野一司(以上、土地所有者)、塚原佑(興道寺区長)、藤川一雄、木子敬一郎

9 出土遺物、調査に係る記録類は美浜町教育委員会が保管している。

凡例

- 1 本書で使用する遺構の略号は以下のとおりである。
SK：土坑、SD：溝状遺構、SX：性格不明遺構
- 2 遺構実測図は $S = 1 / 40$ 、遺物実測図は $S = 1 / 3$ に統一している。
- 3 本書の水平レベルの表示は海拔高(m)を表している。
- 4 須恵器の時期区分は陶邑古窯址群における田辺昭三氏による編年に基づく。

目次

第1章	遺跡の立地と周辺の地理的環境と歴史的環境		
第1節	周辺の地理的環境	(松葉)	1
第2節	周辺の歴史的環境	(松葉)	1
第2章	試掘調査の概要	(松葉)	
第1節	試掘調査に至る経緯	(松葉)	6
第2節	試掘調査の方法と経過	(松葉)	6
第3章	試掘調査の結果	(松葉)	9
第4章	興道廃寺推定地周辺の遺物分布調査、及び地形環境調査について		
第1節	調査の目的及びその方法	(松葉)	13
第2節	遺物分布調査について	(松葉)	13
第3節	地形環境調査について	(上田)	15
第4節	まとめ	(松葉、上田)	16
第5章	試掘調査のまとめ		
第1節	遺構	(松葉)	18
第2節	遺物	(松葉)	18

実測図版目次

第1図	周辺の遺跡分布図	2	第7図	出土遺物図1	33
第2図	調査区周辺概況図	7	第8図	出土遺物図2	34
第3図	1・2トレンチ遺構図	29	第9図	遺物分布調査 遺物分布図1	35
第4図	3・6トレンチ遺構図	30	第10図	遺物分布調査 遺物分布図2	36
第5図	4トレンチ遺構図	31	第11図	土地高低区分図	37
第6図	5トレンチ遺構図	32	第12図	興道廃寺周辺古環境図	38

表目次

表 1	周辺の遺跡一覧	…… 4	表 2	出土遺物観察一覧	…… 25
-----	---------	------	-----	----------	-------

写真図版目次

図版 1	1～3トレンチ・6トレンチ全景	…… 39
図版 2	4～5トレンチ全景	…… 40
図版 3	5トレンチ、SD1	…… 41
図版 4	1～3トレンチ断ち割り状況	…… 42
図版 5	4～6トレンチ断ち割り状況	…… 43
図版 6	調査区周辺現況	…… 44
図版 7	同 上	…… 45
図版 8	同上、作業風景	…… 46
図版 9	遺構出土遺物	…… 47

第1章 遺跡の立地と周辺の地理的環境と歴史的環境

第1節 周辺の地理的環境

美浜町は福井県嶺南地域の東寄りに位置する。町域のそのほとんどは山間部が占め、町域の平野部は主にこれらから流れ出る小河川により形成された小扇状地に支えられている。

美浜町中央部には、滋賀県マキノ町、今津町などと県境をなす大谷山（標高813.9m）に源流が求められる急流河川、耳川の活動により美浜町佐野を扇頂部とした小扇状地が形成されている。耳川の河川活動は野口から興道寺までの左岸に河岸段丘をも形成しているが、興道廃寺はこの河岸段丘上に位置する。これらを含め、美浜町の小平野部は新生代以降に形成された沖積層と段丘堆積物からなり、現況としてはそのほとんどが宅地と田畑からなる。

美浜町興道寺区、興道廃寺より南に目を向けると、耳川を抱くように左岸側には雲谷山（標高786.6m）、矢筈山（標高459.9m）、右岸側には御岳山（標高856.1m）、天王山（標高330.7m）が峰をなしている。いずれも急峻な勾配をもって沖積地へ至ることが特徴である。

雲谷山の岩盤は六甲・山陰型花崗岩類に属し、中生代白亜紀に形成された比較的軟質な黒雲母花崗岩が主体を占める。なお、長さ約7kmからなる耳川断層はここに大よそ南北の走向をもち、扇状地より北西に走向を変化させる。

対して、御岳山の岩盤は丹波層群に属する中生代ジュラ紀に形成された砂岩、チャート、火山岩類、花崗岩などの互層からなり、大よそ南北に走向をもつ奥一松屋断層を有する。

このように、自然環境は海岸部沿いにみられる砂浜、砂洲、リアス式海岸、あるいは国の名勝地である三方五湖（美浜町域においては久々子湖、日向湖）を含めて、豊かな自然環境を有していることが理解できる。これらを利用して、後述するように海岸部沿岸にみられる製塩遺跡、扇状地上にみられる集落遺跡、段丘上にみられる集落遺跡、群集墳など、自明ではあるが特に平野部に有数な遺跡を持つことが特徴的である。

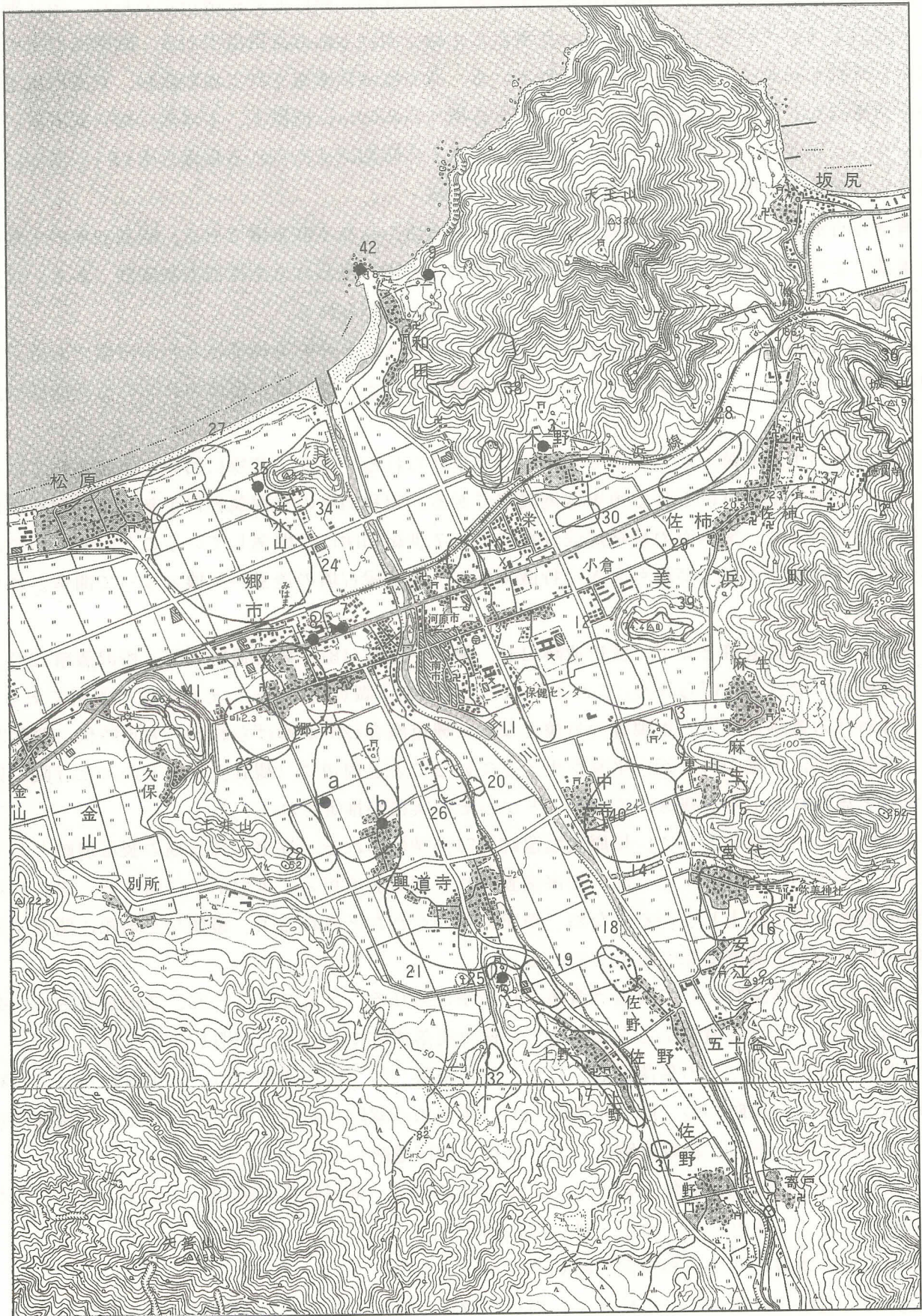
第2節 周辺の歴史的環境

旧石器時代、縄文時代に属する遺跡はこれまでのところ、確認されていない。

弥生時代中期の遺跡として、寄戸遺跡(1)が挙げられる。昭和6年、耕作中に鉄剣形石剣が発見されているが、この石剣は単独の出土であり、遺跡の性格は不明である。

古墳時代の遺跡としては、古墳、古墳群として木野神社古墳(3)、興道寺古墳群(6)、獅子塚古墳(7)、ねねんば古墳(9)などが挙げられる。

木野神社古墳は南に開口する横穴式石室を主体部にもつと考えられ、墳丘は数メートルの円墳であるが、前方部を南に向けた前方後円墳の可能性もある。6世紀代に属するものと思われる。



第1図 周辺の遺跡分布図(s=1/25,000)福井県遺跡地図図改変

獅子塚古墳は明治30年、昭和53年の発掘調査により北部九州にその系譜が認められ、南に開口する竪穴系横口式石室を主体部にもった東西に主軸を向ける前方後円墳である。副葬品などの年代から6世紀初頭にその造営が求められている。石室壁面に塗布された赤彩顔料、石室内出土角坏形須恵器などは極めて大陸色が強い。この古墳の西約50mに位置し、主体部に横穴式石室、石棺を有したとされ、6世紀後半から7世紀初頭にその時期が求められる長塚古墳(8)、あるいは後述する興道寺古墳群を含めた盟主墳的存在である。

興道寺古墳群は獅子塚古墳の南方に展開する小円墳からなる群集墳である。昭和52年の土地改良事業により3基を残して消滅し、この際に横穴式石室と思われる主体部の基底部、あるいは周溝のプランが確認されている。6世紀代にその時期が求められる。

ねねんば古墳は石室石材抜き痕から南に開口する横穴式石室を主体部とした小円墳である。詳細は不明であるが、この古墳を含めて天王山西麗支尾根上に群集墳が形成されている可能性は高い。

古墳時代の生産遺跡として興道寺窯跡(25)が挙げられる。現在、若狭において確認されている最も古い段階に位置付けられる須恵器焼成窯である。昭和54年の発掘調査により、6世紀初頭には操業が開始され、窯床面の最終焼成資料により7世紀初頭には閉窯していることが明らかである。角坏形須恵器の出土が最も大きな特徴であり、獅子塚古墳の造営が契機となって開窯されたことは疑い得ない。

古墳時代の集落遺跡として、流田遺跡(14)、殿ノ下遺跡(18)、観音遺跡(20)、西沢遺跡(22)、馬作遺跡(23)などが挙げられる。これまでのところ、全く調査例がなく、その実態は不明である。

白鳳時代の遺跡として、本調査の対象となった興道廃寺(26)が挙げられる。大正時代、昭和33年、昭和52年に大量の軒丸瓦、平瓦が出土していることと周辺に「観音」などといった寺院に関連すると思われる小字が残されていることからその実在が推定されている。

奈良時代の生産遺跡として、松原製塩遺跡(27)が挙げられる。従来、奈良期の製塩遺跡として扱われてきたが、平成6年に一部、発掘調査され、敷石製塩炉と7世紀前半に属すると思われる大量の製塩土器が出土している。なお、祭祀に用いられたとされる玉、鏡類など祭祀に関連する遺物を形取った土製模造品も出土している。

奈良時代の集落遺跡として興道寺遺跡(21)が挙げられる。平成9年に一部、発掘調査され、奈良時代を主体とした古墳期から平安期までの複合集落遺跡であることが明らかとなっている。

中世から近世にかけての集落遺跡として、流田遺跡(28)、町田遺跡(29)、穴田遺跡(30)、西野遺跡(31)、谷ノ口遺跡(32)、藤ノ木遺跡(33)、洪水山前遺跡(34)などが挙げられるが、調査例がなく実態は不明である。経塚遺跡として、首塚・胴塚遺跡(35)が挙げられる。

中世から近世の城郭、城館遺跡として、国吉城址(36)、粟屋勝久館跡(37)、土井山砦跡(41)などが挙げられる。主として、安土・桃山期に属する。

江戸末期の遺跡として、和田砲台跡(42)が挙げられる。

なお、各遺跡の詳細については表1、周辺の遺跡一覧にまとめているので参照されたい。

表 1 周辺の遺跡一覽

遺跡名	所在地	種別	現状	時期	内容	備考	文献	県遺跡番号
1 寄戸遺跡	寄戸大谷	包含地	水田	弥生中期	昭和6年石剣出土		1,2	30063
2 佐柿古墳群	佐柿旭谷	古墳	山林	古墳	不明		1	30046
3 木野神社古墳	木野	古墳	山林	古墳後期	円墳、横穴式石室	石室露出	1,3,4	30051
4 木野古墳群	木野	古墳	山林	古墳	円墳5基	墳丘流出	1	30053
5 高達古墳	興道寺高達	古墳	山林	古墳後期	表探須恵器6世紀前半		1	30070
6 興道寺古墳群	興道寺塚原	古墳	水田	古墳後期	円墳8基?	3基現存	1,4,5	30074
a 田中塚古墳	興道寺塚原	古墳	墓地	古墳後期	約5m円墳	墳丘削平	1,4,5	
b 御前塚古墳	興道寺塚原	古墳	水田	古墳後期	約5m円墳、横穴式石室	石室露出	1,4,5	
7 獅子塚古墳	郷市横田	古墳	市街	古墳後期	前方後円墳(約33m)、横穴式石室 須恵器、埴輪、玉類、鉄製品	明治30年、昭和53年調査	1,2,4 2	30076
8 長塚古墳	郷市	古墳	市街	古墳後期	円墳?、横穴式石室、石棺 須恵器、紡錘車	消滅	3	
9 ねねんば古墳	和田	古墳	山林	古墳後期	円墳?、横穴式石室	石室石材散乱	3	
10 茶屋ノ上遺跡	河原市茶屋ノ上	包含地	水田	古墳~中世	須恵器、土師器		1	30054
11 猿橋遺跡	麻生猿橋	包含地	水田	古墳~近世	須恵器、土師器、陶器		1	30055
12 秋名古遺跡	麻生秋名古	包含地	水田	古墳、近世	須恵器、土師器、陶器		1	30056
13 末国遺跡	麻生末国	包含地	水田	古墳、中世	須恵器、土師器、陶器		1	30058
14 流田遺跡	麻生流田	包含地	水田	古墳	土師器		1	30059
15 七反田遺跡	麻生七反田	包含地	水田	古墳、中世	土師器、土鍔、陶器		1	30061
16 宮代遺跡	宮代	包含地	水田	古墳、中世	須恵器、土師器、陶器		1	30062
17 上野遺跡	佐野上野	包含地	水田	古墳、近世	須恵器、土師器、陶器		1	30065
18 殿ノ下遺跡	佐野殿ノ下	包含地	水田	古墳	土師器		1	30066
19 高善庵遺跡	興道寺	包含地	水田	古墳、平安	須恵器、土師器、瓦?、陶器		1,4	30068
20 観音遺跡	興道寺観音	包含地	水田	古墳	須恵器、土師器		1	30072
21 興道寺遺跡	興道寺	集落址	水田	古墳~平安	竪穴式住居址、掘立柱住居跡 須恵器、土師器、製塩土器、鉄製品	平成9年調査	1,5,6	30073
22 西沢遺跡	興道寺西沢	包含地	水田	古墳	須恵器、土師器		1	30075
23 馬作遺跡	郷市馬作	包含地	水田	古墳	土師器		1	30078
24 郷市遺跡	郷市	包含地	水田	古墳~平安	須恵器、土師器		1	30080
25 興道寺窯跡	興道寺高達	窯跡	山林	古墳後期	須恵器、埴輪、土鍔	昭和54年調査	1,2,6,9,11	30069
26 興道廃寺	興道寺観音	寺院址	畑地	白鳳	瓦、須恵器、土師器、製塩土器	観音畑廃寺	1,2,4,7	30071

遺跡名	所在地	種別	現状	時期	内容	備考	文献	県遺跡番号
27 松原製塩遺跡	松原	製塩	砂洲	古墳～奈良	敷石炉、製塩土器、須恵器、土師器	昭和52年、平成6年調査	1、2、8～10	30083
28 流田遺跡	佐柿流田	包含地	水田	平安～中世	須恵器、陶器		1	30048
29 町田遺跡	佐柿町田	包含地	水田	中世	土師皿		1	30049
30 穴田遺跡	佐柿穴田	包含地	水田	平安～中世	須恵器、陶器		1	30050
31 西野遺跡	佐野西野	包含地	水田	平安～中世	須恵器、陶器		1	30064
32 谷ノ口遺跡	興道寺谷ノ口	包含地	水田	平安、近世	須恵器、青磁、寛永通宝		1	30067
33 藤ノ木遺跡	郷市	包含地	市街	平安～中世	須恵器、陶器		1	30077
34 洪水山前遺跡	郷市洪水山前	包含地	水田	平安～中世	須恵器、陶器		1	30081
35 首塚・胴塚	郷市	経塚	水田	中世?			1	30082
36 国吉城址	佐柿城山	城跡	山林	安土桃山	主郭、砦、櫓台など		1	30045
37 栗屋勝久館跡	佐柿	城館跡	山林	安土桃山	石垣	町指定史跡	1	30047
38 天王山西砦	和田	城跡	山林	安土桃山	土塁など		1	30052
39 麻生砦	麻生	城跡	山林	安土桃山			1	30057
40 本條殿	中寺	館跡	水田	不明			1	30060
41 土井山砦	久保	城跡	山林	安土桃山	空堀	大部分消失	1	30079
42 和田砲台跡	和田	砲台跡	山林	江戸末期	一辺3m方形プラン、石組み		3	

参考文献一覧

- 『福井県遺跡地図』 1993
- 『福井県史 資料編13 考古』 1986
- 『三方郡誌』 1911
- 『昭和39年、54年美浜町文化財台帳』 1964、1979
- 山口 充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井県考古学会誌第2号』
- 『興道寺遺跡発掘調査報告書』 1984
- 『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』 1998
- 網谷 克彦「松原遺跡の調査」『敦賀論叢 敦賀女子短期大学紀要 第10号』 1987
- 『興道寺窯跡発掘調査概報』 1995
- 『ふくい発掘最前線』 1979
- 入江 文敏「古墳時代土器製塩の画期と首長墓の動向」 1998
- 『横田健一先生古稀記念文化史論叢 上』 1987

福井県教育委員会
福井県
福井県三方郡教育会
美浜町教育委員会
福井県考古学会
美浜町教育委員会
北陸古瓦研究会
敦賀女子短期大学
美浜町教育委員会
福井県立博物館
創元社

第2章 試掘調査の概要

第1節 試掘調査に至る経緯

本試掘調査の経緯は県営ふるさと農道緊急整備事業（以下、上記事業という）などによる。

平成9年度の段階で美浜町長より町教育委員会へ、平成10年1月14日付け、美建乙第10号において上記事業に係る路線予定地内の埋蔵文化財確認調査の依頼がなされている。町教育委員会は現地踏査、あるいは当該地周辺における過去の調査例から予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性が高い旨を平成10年1月19日付け、美教乙第17号において回答した。

平成10年6月の段階で、上記事業において路線を決定し、用地買収に着手したい旨を福井県嶺南振興局二州農林部（以下、二州農林部という）、町建設課から相談を受ける。

これに対し、町教育委員会は福井県教育庁文化課（以下、県文化課という）と協議し、路線予定地付近にその範囲が推定される興道廃寺に対し、工事により及ぼされる影響を考慮し、平成10年7月8日に県文化課、町教育委員会、二州農林部、町建設課による上記事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行っている。

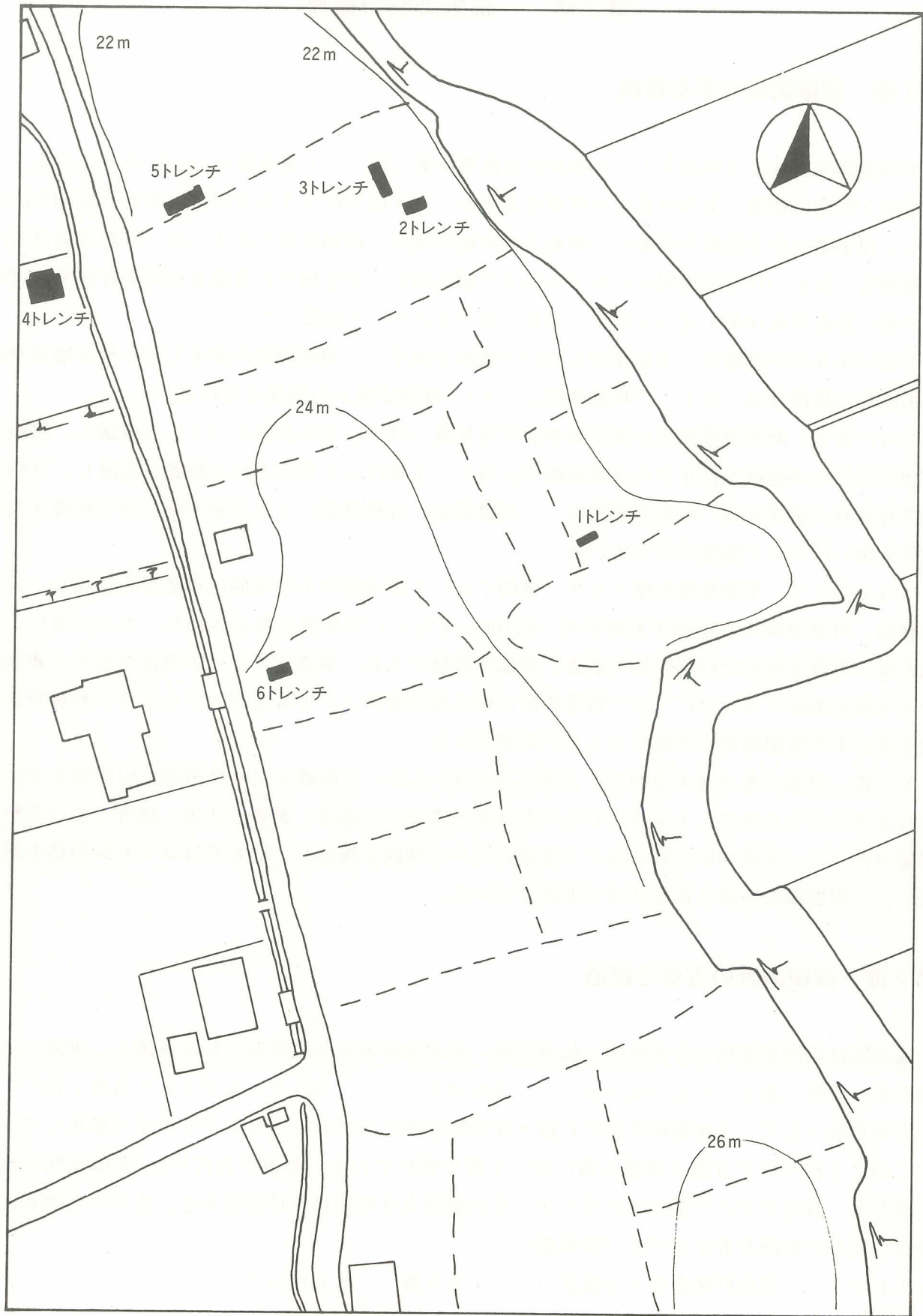
これについて、現地視察を踏まえて、各間において興道廃寺の学術的な重要性を認識し、二州農林部、町建設課より路線予定地を北へ約100mずらした代替案が提示された。これに対し、県文化課、町教育委員会は将来的な調査、整備を視野に入れ、基礎データの収集を含めた興道廃寺の寺域を確認するために、また路線決定に係る基礎資料としても活用できるように町教育委員会主体による試掘調査を実施することが決定された。

その後、平成10年7月31日付け、美教乙第300号において埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官あてに行うと共に、1ヶ月にわたり各方面と調査区の選定、調査方法等、調査に係る調整、準備を行った。平成10年8月16日より現地における準備を開始し、同8月20日より試掘調査を開始した。現地調査は同9月3日まで実施している。

第2節 試掘調査の方法と経過

調査区は水野和雄氏らと字界図、航空写真、現況地形等を基礎資料として協議し、決定した。調査前の段階で想定される寺域を復元し、試掘調査により寺域内外の境界を表す遺構を検出することを目的として、土地借用を含めた様々な制限を受けながらも、6トレンチまで設定している（このことについては第4章第4節において若干触れている。参照されたい）。各調査区の決定に関わり、諸先生方のご批判があろうが、その責は全て町教育委員会にある。以下に各調査区の地番、及び土地所有者を述べる（敬称略）。

1 トレンチ 美浜町興道寺4号観音 23番 井上ハルミ



第2図 調査区周辺概況図 S=1/1,000(町教育委員会作成)

2トレンチ	興道寺4号観音	47-3番	西野 宏司
3トレンチ	興道寺4号観音	47-3番	西野 宏司
4トレンチ	興道寺9号土井ノ上	4番	西野弥太郎
5トレンチ	興道寺3号狐塚	33番	杉谷 正義
6トレンチ	興道寺4号観音	28-1番	鳥居 秀樹

調査は原則として4m×2mのトレンチ調査とし、調査の状況により随時拡張した。掘削深度は耕土を除去した後、下層の状況を確認しながら随時掘り下げている。全ての調査区において、土層を把握するために断ち割り調査を行っている。各調査区周辺の現況が茶畑等の畑地であるため、重機の導入ができず、土砂の掘削は全て人力で行っている。

地元の古老、あるいは各調査区の土地所有者等からの聞き取り調査により、調査区周辺は近年、茶の栽培に加えて、ゴボウ、大根の栽培が盛んに行われており、十分な耕土を確保するために重機を用い、地中を掘削することが多いとの情報が得られた。従って、調査の結果、耕作に伴う攪乱が確認される可能性も想定し、調査を行った。

各調査区における図化作業は各調査区にそれぞれ任意に設定した基準点をもとに行った。各トレンチの位置は第2図「調査区周辺概況図」に示している。

なお、各調査区は興道寺遺跡（県遺跡番号30073）に含まれるものの、過去の土地改良事業に伴い古瓦が出土していること、現在においても古瓦、須恵器、土師器などの破片が採集されること、観音という小字が残されていることから興道廃寺に含まれる、あるいは近接している可能性は高く、従って調査対象を興道廃寺として調査を行った。

以下、調査日誌を抄録する。

- 8月16日～ 調査区杭打ち、水準点より調査区付近までレベル移動、調査器材の搬入
- 8月20日 1～4トレンチ表土除去、4トレンチにおいて遺構確認
- 8月21日 1～4トレンチ土層確認のため断ち割り、4トレンチ拡張、1トレンチ図化開始
- 8月23日 1・3トレンチ引き続き断ち割り
- 8月24日 1トレンチ埋め戻し、2・3トレンチ図化開始、4トレンチ遺構掘り下げ、5トレンチ表土除去
- 8月25日 2・3トレンチ埋め戻し、4トレンチ遺構図化開始、5トレンチ遺構確認・掘り下げと平行して出土状況図作成開始、各調査区基準点のトラバース測量
- 8月26日 5トレンチSD1完掘、6トレンチ表土除去の後、図化開始
- 8月27日 4トレンチ反転拡張、5トレンチ拡張・図化開始、6トレンチ図化・埋め戻し
- 8月28日 引き続き4トレンチ反転拡張、5トレンチ拡張・図化
- 8月30日 4トレンチ拡張部遺構完掘、5トレンチ図化
- 9月1日 4・5トレンチ埋め戻し、周辺地遺物分布調査開始
- 9月2日 引き続き周辺地遺物分布調査
- 9月3日 調査器材の撤収及び図面等最終確認

第3章 調査の結果

調査の結果を各トレンチごとに述べる。

1 トレンチ

寺域範囲の東縁を検出する目的で東西方向に約3.6m×約1.6mのトレンチを設定した。調査面積は約5.56㎡である。トレンチ東端において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土（層厚約20～55cm、以下同じ）、茶褐色砂礫土（約20cm）、茶褐色砂礫（約20cm）、暗茶褐色砂礫（約50cm）、暗茶褐色砂礫土（約20cm）、粘土混茶褐色砂礫土（20cm以上）からなる。耕土下は砂礫層からなり、遺構を構築する基盤層^{註1}は確認されなかった。

暗茶褐色砂礫層上面において遺構検出を行ったが、遺構、遺物ともに確認されなかった。

2 トレンチ

寺域範囲の東縁を検出する目的で東西方向に約5.2m×約2.1mのトレンチを設定した。調査面積は約10.92㎡である。トレンチ西端において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土（約20cm）、攪乱土層（約90cm）、暗黄灰色砂礫（約10cm）、赤黄灰色粘砂土～粘質土（10cm以上）からなる。耕土下の大半が攪乱により層が失われている。攪乱層中の土壌より砂礫層が形成されていた可能性が高い。基盤層は確認されなかった。

遺構、遺物ともに確認されなかった。

3 トレンチ

寺域範囲の北縁を検出する目的で南北方向に約6m×約2mのトレンチを設定した。調査面積は約12㎡である。トレンチ南端において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土（約30cm）、攪乱土層（約30cm）、暗黄褐色砂礫（約30cm）、黄茶褐色粘砂土（約40cm、黒褐色土がブロック状に混入）、暗黄灰色砂礫（約40cm、明黒褐色土がブロック状に混入）、黄褐色礫混粘砂土（約10cm）からなり、以下灰黄色系の粘土が数センチ単位で互層となる。^{註2}耕土下が攪乱により層が失われている状況は2トレンチと同様である。以下は砂礫層からなり、さらに粘土層へと続く。基盤層は確認されなかった。

遺構、遺物ともに確認されなかった。

4 トレンチ

寺域範囲の西縁あるいは北縁を検出する目的で当初、南北方向に約4m×約2mのトレンチを設定したが、確認された遺構の広がりから遺構の性格を把握するため、調査範囲を随時、西へ拡張した。最終的に東西方向約6m×約3.6mに加えて、東西方向に約3.2m×約1.1mを付したト

レンチであり、調査面積は約25.12㎡である。トレンチ南東隅において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土（約20cm）、明黄褐色粘砂土（基盤層、約20cm）、黄褐色砂礫（約20cm）、黄褐色砂混礫（約30cm）、濁黄褐色砂混礫（50cm以上）からなる。耕土下は基盤層、さらに砂礫層へと続く。遺構は基盤層上面から掘り込まれている。

調査区北東部には土地改良時に形成されたとと思われる攪乱が確認されたが、溝状遺構（SD）2基、土壙（SK）3基、性格不明遺構（SX）1基の計6基の遺構が確認されている。

各遺構について以下、記述する。

SD 1

長軸約1.9m、短軸約0.9mからなる東西に長い溝状遺構である。遺構の深さは約0.3mであり、覆土は3層からなる。

出土遺物は須恵器2点（1・2）、土師器1点（3）である。^{註3}

遺物の年代観より、6世紀中葉にこの遺構の時期が求められる。

SD 2

長軸現存長約1.5m、短軸現存長約0.5mからなる南北に長い溝状遺構である。この遺構の南側は攪乱により消失している。遺構の深さは約0.1mである。

出土遺物は土師器1点（4）である。

遺物の年代観より、6世紀代にこの遺構の時期が求められる。

SK 1

長軸約1.3m、短軸約0.9m、東西に細長い楕円形プランからなる土壙である。遺構の深さは約0.2mである。覆土は2層からなる。

出土遺物は土師器1点（6）である。

遺物の年代観より、6世紀代にこの遺構の時期が求められる。

SK 2

長軸約1.4m、短軸約1.1m、東西に細長い楕円形プランからなる土壙である。遺構の深さは約0.3mである。覆土は2層からなる。

出土遺物は須恵器1点（7）、土師器1点（8）である。

遺物の年代観より、6世紀代にこの遺構の時期が求められる。

SK3

長軸約1.9m、短軸約1.4m、東西に細長い楕円形プランからなる土壇である。遺構の深さは約0.2mである。覆土は2層からなる。

出土遺物は須恵器1点(9)、土師器6点(10~15)である。

遺物の年代観より、平安期にこの遺構の時期が求められる。

SX1

長軸約0.6m、短軸現存長約0.4mからなる遺構であるが、遺構の北側を攪乱により失い、平面プラン、その規模は不明である。遺構の深さは約0.1mである。SD2と同一の遺構である可能性をもつ。遺物が確認されていないため、この遺構の時期は不明である。

なお、表土から平瓦破片1点(16)が、攪乱部から須恵器1点(18)、土師器1点(17)が出土している。須恵器、土師器については6世紀代、平瓦については7世紀後葉代に属すると思われる。

5 トレンチ

寺域範囲の北縁を検出すること、4トレンチにおいて確認された遺構の東への広がりを把握することを目的として当初、東西方向に約4m×約2mのトレンチを設定したが、確認された遺構の性格を把握するため、調査範囲を北東へ拡張した。最終的に東西方向約5.6m×約2.6mに加えて、南北方向に約1.6m×約0.4mを付したトレンチであり、調査面積は約15.1㎡である。トレンチ北西隅において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土(約20cm)、明黄褐色粘砂土(基盤層、約40cm)、暗茶褐色砂礫(約10cm)、黄褐色砂礫(約10cm)、淡黄褐色粘砂土(約10cm)、砂(40cm以上)からなる。耕土下は基盤層、さらに砂礫層、砂層へと続く。遺構は基盤層上面から掘り込まれている。

調査区東端より溝状遺構(SD)が1基確認されている。

SD1

長軸現存長約3.0m、短軸現存長約1.2mからなる南北に展開する溝状遺構である。遺構床面の立ち上がりから遺構の推定幅は約1.3mとなる。遺構最深長は約0.5mからなり、遺構縦断ラインは徐々に落ちこむが、横断ラインは急激に落ちこみ、平坦面を形成する。覆土は2層からなる。

出土遺物は須恵器64点(坏蓋33点、坏身15点、甕胴部11点、甕口縁部2点、甕1点、長脚一段三方透かし高坏1点、無蓋高杯1点)、土師器64点(甕口縁部24点、甕頸部2点、甕胴部36点、椀1点、不明1点)、製塩土器7点以上(浜禰ⅡA式6点以上、浜禰ⅡB式1点)である。^{註4}

遺物の年代観より、6世紀初頭から中葉にこの遺構の時期が求められる。

なお、表土より6世紀前半代にその時期が求められると思われる須恵器32点（坏蓋8点、坏8点、甕口縁部1点、甕胴部5点、不明10点）、土師器30点（甕口縁部3点、甕頸部1点、胴部26点）が、奈良期にその時期が求められる須恵器1点（坏B蓋）が出土している。

6 トレンチ

寺域範囲の西縁を検出する目的で東西方向に約4.2m×約2.1mのトレンチを設定した。調査面積は約8.82㎡である。トレンチ西端において土層確認のための断ち割りを行っている。

その層位は黒褐色土（約40cm）、礫混黄褐色粘砂土（約30cm）、暗黄褐色砂礫（約10cm）、黒褐色砂礫（約20cm）、黄褐色砂礫（30cm以上）からなる。耕土下は砂礫層からなる。耕土下の礫混黄褐色粘砂土は極めて不安定な状態で層を成しており、耕作に伴う攪乱と想定している。遺構構築層は確認されなかった。

礫混黄褐色粘砂土層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認されなかった。

遺物は表土中より須恵器2点（218・219）、平瓦1点（220）が出土している。

註1 平成9年から10年にかけての一連の調査の中で、本調査区周辺では明黄褐色粘砂土層をベースとして、その上面から遺構を掘り込んでいることを確認している。ここではこの明黄褐色粘砂土層を基盤層と呼んでいる。

註2 東京都立大学大学院、山崎晴雄氏のご教示によれば、河岸段丘が形成される過程において、一時的に川底となり、水の移動が失われる時、このような粘土状の土壌が形成されるとのことである。

註3 各遺物の内容については、出土遺物観察一覧にまとめているので参照されたい。なお、（ ）内数字は遺物番号を表している。

註4 明らかに同一個体と認定されるものを除き、無理な個体同定は避けたため、個体数が変動することは十分にあり得る。

第4章 興道廃寺推定地周辺の遺物分布調査、及び地形環境調査について

第1節 調査の目的及びその方法

美浜町興道寺小字、観音・湊ノ上などに存在が推定されている興道廃寺について、その出土瓦の分析、検討等については水野和雄氏らにより十分なされているものの、廃寺そのものの規模、構造等については、現状として調査例の乏しさも相まってその実態は不明である。

今回実施した試掘調査に平行して、これらの内容の一部を把握するための試みとして、現況地形である茶畑を中心とした範囲において、下記の方法により、表土中に含まれる遺物の分布確認、地形高低差の把握等の調査を実施した。

1 各土地所有者毎に区分された対象区域内の地割図^{註1}を用い、各区分内の表土中に含まれる遺物を採集し、その分布を落とし込む。

2 1と同じ地割図を用い、隣接する区分との高低差を比較し、相対的な高低差を落とし込む。

上記の方法1、2それぞれから導き出される成果、及び方法1、2を組み合わせることにより得られる成果を次節以降^{註2}で述べる。

第2節 遺物分布調査について

前述の方法1を用いて、雑草等で覆われた区画を除き、対象区域を全面的に踏査した。

その結果、対象区域内から主に6世紀から9世紀までの須恵器、土師器、製塩土器、平瓦の破片、細片が採集されている。可能な限りの時期認定を行い、6世紀代以前、7世紀代、8世紀代、9世紀以降と4期に細分し、各期毎に各資料の特徴、遺物分布^{註3}を記述する。

6世紀以前に属する資料として、須恵器、土師器、製塩土器が採集されている（第9図）。

須恵器は坏類、甕類、壺類などの器種がみられた。

坏類は88点採集されている。採集資料は口縁部、坏蓋天井部、坏底部からなる。器面調整は天井部外面、あるいは底部外面に回転ヘラ削り調整が施され、内面、口縁部は丁寧に回転ロクロナデ調整が施されている。色調は黒色から灰色を呈する。胎土は密であり、径5mmまでの黒色、白色細砂粒を適度に含んでいる。生焼け状の資料もみられるが、概して焼成は良好であり、堅く焼き締まっている。これらの諸特徴は本試掘調査により得られた須恵器資料と共通性が高い。

口縁部の形態等により、TK10型式段階からTK209型式段階に属すると思われる資料が一定量みられることから、これらの坏類は6世紀中葉～後半代に属すると思われる。

甕類は24点採集されている。採集遺物はいずれも胴部からなる。器面調整は外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕が残されている。器厚は5mm～10mmであり、総じて薄い。胎土、焼成、色調は多分に坏類と共通する。

壺類は8点採集されている。この中には甕と思われる資料が3点含まれる。器面調整は内外面とも回転ロクロナデ調整による。胎土、焼成、色調は坏類、甕類と共通する。

この他に器台、脚付壺類の脚部と思われる資料が2点採集されている。

製塩土器については浜禰ⅡB式製塩土器破片が14点、また土師器甕類の細片が数点採集されている。製塩土器は摩滅が著しい。須恵質のものを1点含む。

遺物の分布について、6世紀以前の資料は対象区域のほぼ全域に分布し、特に分布の偏りは認められない。傾向としてはN区において遺物量が増加する傾向がある。

7世紀代に属する資料として、須恵器がみられた(第9図)。

須恵器は坏蓋Gが6点みられたのみである。いずれも口縁部破片であり、返りを有する。胎土は緻密で、6世紀代の資料と比較し砂粒をよく含む。色調は灰色を呈する。これらの特徴は後述する8世紀代の資料と共通性が高い。

遺物の分布について、7世紀代については資料数が極めて少なく、散見されるのみである。

8世紀代に属する資料として、須恵器、土師器が採集されている(第10図)。

須恵器は坏類、甕類といった器種がみられた。

坏類は58点採集されている。採集資料は口縁部、坏蓋天井部、坏底部からなる。器面調整は天井部外面、底部外面に回転ロクロナデ、あるいは回転ヘラ削り調整が施され、内面、口縁部は丁寧に回転ロクロナデ調整が施されている。色調は灰色から灰白色を呈し、6世紀代の資料に比べ、色調は総じて明るい。胎土についても6世紀代の資料よりも緻密であり、このために径0.5mm～1mmまでの白色粗砂、細砂粒を目立たせることとなる。焼成は良好であり、堅く焼き締まっている。これらの諸特徴は平成9年度調査の興道寺遺跡発掘調査により得られた須恵器資料と共通性が高い。

高台、口縁部、天井部の形態、製作技法から、これらの坏類は8世紀代に属すると思われる。

甕類は27点採集されている。採集遺物はいずれも胴部からなる。器面調整は外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕が残されているが、6世紀代の資料に比べ、原体は荒くなる。器厚は10mm内外～10mm以上からなり、厚くなる。胎土、焼成、色調は坏類と共通する。

この他に、土師器甕類が数点採集されている。

遺物の分布について、8世紀代の資料は対象区域C区北半に空白が認められる他は、ほぼ全域に分布する。

9世紀以降に属する資料として、須恵器坏類が18点、緑釉陶器が1点採集されている(第10図)。

坏類は口縁部、坏蓋天井部、坏底部からなる。器面調整は天井部外面、底部外面に回転ロクロナデ調整、あるいは回転ヘラ削り調整が施され、内面、口縁部は丁寧にナデ調整が施されている。色調、胎土、焼成は8世紀代の資料と共通性は高い。

高台、口縁部、天井部の形態、製作技法から、これらの坏類は9世紀以降に属すると思われる。

遺物の分布について、9世紀以降の資料は対象区域C区に偏在する傾向が認められる。

なお、平瓦が23点採集されている。いずれも破片資料である。

調整として、凸面にヘラナデ、あるいはヘラ削り調整を施す資料が大半であり、細かいハケメを施す資料が1点みられる。凹面はいずれも布目痕を残すが、さらに平行文叩きを施す資料3点、布目痕を撫で消す資料が2点みられる。色調は黒色～灰色を呈し、焼成が生焼け状のもの1点を含む。胎土は密であり、径0.5mm～1mmの白色粗・細砂を含む。7世紀後葉から8世紀代に属すると思われる。

瓦の分布は対象区域C区南半から南側に集中する。

第3節 地形環境調査について

対象区域の現況は現在、茶やゴボウ、大根などの作物が栽培される畑地である。この対象区域の周辺は、段丘上、段丘下ともに主に水田部を対象として、昭和53年の土地改良事業により整然とした土地区画がなされ、田畑が並ぶ状況にある。

調査は前述の方法2を用いて行い、最高位を示すAランクから最低位を示すHランクまでの8段階にて土地高低差を区分した(第11図)。なお、対象区域内の空白地点は倉庫や宅地、もしくは雑草等で地表が覆われているなど、諸事情により調査が行えず、対象から除外した。以下、現地形の土地高低区分のみならず、第12図にて図示した旧地形ならびに旧地形のコンターラインを含め、地形環境を記述する。

N区はE・Fランクが面的に展開し、南西から東北への緩やかな傾斜がみられる(図版6・17)。対象区域中、低位に属する。東縁段丘崖は、現況と旧地形との間に大差はない。

次にC区は、Cランクが全体的に面的な広がりを見せる。

北半においてCランクは現在、南北方向に舌状に展開するが、旧地形においては第12図、C区北半西縁にみるよう低位地はなく、面的な展開をみせたと思われる。このD・Eランクは後世による土砂の削平によるものと思われる。なお、東への傾斜(図版6・18)は、20mコンターラインとE-Fランク間ラインがほぼ一致し、段丘崖においてもさしたる変化はみられない。

南半においては、Cランクが面的に展開、C区南半の約50%を占めている。その南にはBランクもまたある程度面的な展開をみせる^{註4}。このC区南半において、旧地形段丘崖はかつて、同区北半東張り出し部より、南へなめらかな曲線を描く形で存在していたが、土地改良事業、もしくは河川活動等の何らかの原因により、東西約10～20m、南北で約90mにかけて削平を受け、現在の地形環境となったことが伺える^{註5}。C区南半においては北半のように緩やかに東へ傾斜せず、B・C・Dランク、あるいはS区Aランクからすぐに崖法面となることがこのことを裏付けている。かつ、対象区域全域が南から北へ傾斜をみせることは自然地形の反映である(図版6・19)。

S区は東半においてAランクが面的に展開をみせ、S区内において約50%を占める(図版7・20)。また、全区域において60%以上を占めるA～CランクがS区においては80%以上をも占めるなど、他の区域と比して高位の地となる。S区内では現在、東高西低の地形である(図版7・

21) が、東端消失以前は中央高東西低、もしくは西高東低の地形であったことも予測される。

第4節 まとめ

これまでの分析により、①興道廃寺が建立されたと想定される7世紀後葉代において、対象区域での採集遺物量は極端に減少する。かつ、その分布はC区以北に限定され、S区には全くみられなくなる。②平瓦の分布は対象区域C区以南の特定範囲に集中する。③地形的に対象区域S区最南端が最も高位であり、北方にすすむにつれ、概して高度を減じる、以上を当該地の歴史的環境、あるいは興道廃寺の内容を考える上での特徴として挙げるができる。

過去に瓦が採集された、あるいは出土した地点について、大正期に軒丸瓦がほぼ完形で1点出土したとされるa地点(第12図)、昭和53年、土地改良に伴う試掘調査時に大量の軒丸瓦、平瓦が出土したとされるb地点(第12図)を挙げる^{註6}ことができ、これに今回の分布調査により平瓦が採集された地点(第9図)を含めると、瓦の分布は茶畑南部に集中し、地形的に高位に属する範囲(第11図、A・Bランク)とほぼ重複する。

ここで、上記のことと各期の遺物分布の状況から、6世紀から9世紀までの茶畑周辺における歴史的環境を考察すれば、6世紀代に対象区域N区、小字「狐塚」に古墳が築造され、N区を中心として南方、あるいは現在水田面である西方へある程度、面的に集落が展開されたことが考えられる。本試掘調査、4・5トレンチ内で確認された当該期の遺構はこの集落に包括される。

7世紀の段階には対象区域における遺物量の極端な減少にみるように、人間活動の痕跡が消失し、興道廃寺建立の素地が養われる。7世紀後葉において、高位を保つ対象区域S区を選地し、廃寺が建立されたとされる。過去に採集、出土している瓦の年代観がこのことを裏付けている。

8世紀代には、平成9年度発掘調査の興道寺遺跡における奈良期の集落の面的な展開にみるように、また、対象区域における8世紀代の遺物量の増加により、再び、当該地における人間活動の密度は高くなる。対象区域N区から西方に向かって、廃寺に関わる集落を構成していた可能性は高い。

9世紀に入り、遺物分布にみるように当該地における人間活動の痕跡が失われることはないものの、廃寺の消滅に連動するものか人間活動は希薄となるようである。

最後に、今回の分布調査により得られた成果より、興道廃寺の寺域、伽藍域の推定を試みたい。想定される寺域、伽藍域の範囲を第12図に示した。

寺域については南縁、東縁、西縁は河川活動、あるいは土地改良事業により削平、あるいは消失していることが想定される。昭和53年時の試掘調査結果は寺域西縁の存在を伺わせるものであり、^{註7}南縁については現況よりさらに南に展開していたとされる茶畑の縁に合致していたと思われる。北縁は地形的に一段低まり、8世紀代の遺物分布が疎となる部分にその存在が想定される。第12図、旧地形図にみられる22.5mコンターラインに寺域北縁ラインが概ね一致すると思われる。

このことから寺域の範囲は南北、東西ともに1.5町という寺域を有していた可能性を考えたい。^{註8}

伽藍域については、茶畑南端中央付近にみられる地割の状況からd地点に中門の存在を推定でき、e地点に塔、あるいは金堂といった寺院施設の存在を想定できる。伽藍域については、南北、東西ともに1町を想定しておきたい。

なお、今回の試掘調査を実施するにあたり、第12図、 α ラインに興道廃寺の寺域を想定し、調査区を設定し、調査を行ったが、寺域を確認することはできなかった。調査を実施した実感として、寺域は茶畑内の高位地に属する第12図において提示した範囲に概ね合致することを確信している。

最後に、状況として層位的に耕土直下に遺構構築面をもつと思われること、ゴボウ、大根等の栽培に伴う地中掘り起こしによる攪乱がみられること、土地改良事業により茶畑の一部を含めた現況の改変が行われていること、周辺に寺院址建物等の礎石に用いられるべき巨石が全くみられないことから遺構残存度は低いものと考えられ、今後の早急な保護策が検討されるべきである。

なお、最後に本章の記述を進めるにあたり、水野和雄氏に有益なご指導、ご教示を得たことを申し添え、記して感謝を申し上げる。

註1 以下、本章においては調査範囲を対象区域と呼称する。なお、便宜上、対象区域を北からN区、C区（北半・南半）、S区と区分する（第11図）。

註2 上記の方法1、2それぞれの問題点として、方法1は表採区分に広狭の差違があり、単純な比較ができない点、方法2は高低差の判断が主観的であり、絶対的なレベルで客観的に明示できない点が挙げられる。

註3 採集資料はいずれも破片、細片資料のため、時期決定について誤りが生じることをお断りする。

註4 C区南西端Fランク（第12図c地点）について、調査作業員の久保氏により、「土地改良以前は北隣りとほぼ同レベルの高さであったが、土地改良時に西進する道路拡幅のため、当地より土砂を採取した。その際に、瓦の出土がみられた」とのご教示を得た。対象区域西縁に集中してみられる低位地（図版7・22）については土地改良などによって、土砂採取や盛土（図版8・23）が行われていることを裏付けている。

註5 前出の久保氏によると対象区域南端は現在より20～30m程、茶畑が展開していたというご教示を得た。当然、茶畑南端を東西に走る道路は土地改良以前は存在し得ない。

註6 他にも、対象区域S区においては、耕作中に瓦類が出土する事例が各土地所有者により報告されている。

註7 コンテナ20箱程の平瓦、軒丸瓦が出土し、基壇らしき土地の高まりが残されていたとのことである。

（水野和雄「平成10年度美浜町歴史講座 ふるさとむかしよもやま話 第1夜 興道廃寺のルーツを探る」レジュメ 1998年による）。土地の高まりについて、築地塀といった施設を想定できないであろうか。

註8 調査例の全くない現状からは安易な想定すら慎むべきかも知れない。

第5章 試掘調査のまとめ

第1節 遺構

調査の結果、4トレンチ、5トレンチより遺構が確認された。

4トレンチにおいて確認された遺構は古墳時代後期、6世紀代にその時期が求められるものと平安期にその時期が求められるものとに区別された。平安期にその時期が求められた遺構については、若干の時期的な咀嚼が認められるものの、平成9年度に調査を実施した興道寺遺跡内調査区において検出した奈良期～平安期に属する遺構群と一連の集落を形成するものと思われる。従って、9～10年度の一連の調査において、興道寺遺跡における律令期に属する遺構分布域の現段階での北東縁、北西縁を確認し得たこととなる。

5トレンチにおいて確認された溝状遺構は古墳時代後期、6世紀初頭～中葉代にその時期が求められる。6世紀中葉には廃棄され、埋没したことが出土遺物の年代観から想定される。この遺構は調査区の小字である「狐塚」が示すとおり古墳の周溝とも想定されたが、その平面プランが直線的に展開する様相であることとその幅が狭いことから判断して溝状遺構として扱った^{註1}。

この溝状遺構と4トレンチにおいて確認した古墳時代後期に属する遺構は一連の集落に伴うものと判断され、第4章第2節で述べたように小字、狐塚、観音、土井ノ上、中町には6世紀代の須恵器片、土師器片、製塩土器片といった遺物が表採されることと平成9年度に調査を実施した興道寺遺跡内調査区において古墳期の遺構、遺物が確認されていることからして、現況地形である茶畑の北側半分にその中心を置き、南方、西方へ向かってある程度面的に古墳時代後期に属する集落遺跡が展開していた可能性は高い。ここからさらに西に展開する興道寺古墳群と近接することからこの集落は古墳群の被葬者層の居住域である可能性も合わせて指摘できる。

従って、興道廃寺について、調査区周辺にその存在を認めるならば古墳時代後期の集落が廃棄された後、整地され、建立された可能性を持つ。

1～3トレンチについてであるが、遺構、遺物が確認されなかったことについて、もともと遺構が構築されなかった、もしくは河川活動により基盤層の削平を受けたという二通りの解釈が可能であるが、現段階では前者の理由を採用しておきたい。

6トレンチについては、攪乱を受けていたという制限を受け、内容を明らかにすることはできなかった。

第2節 遺物

本調査により得られた須恵器、土師器、製塩土器について知り得る知見を述べる。

須恵器

4、5、6 トレンチにおいてそのほとんどが6世紀初頭～中葉代に属する須恵器が出土している。ここでは、一括性の高い5 トレンチ、SD1 出土資料を対象に記述する。

器種構成としては坏蓋、坏身、甗、甕、短頸壺、長脚一段高杯からなり、坏類が主体を占める。瓶類がみられないものの、ごくありふれた器種構成である。各資料をI・II群に分類し、その特徴を記述する。

I 群

坏蓋は5点(19～23)からなる。推定口径約15cm、器高5cm弱、口縁部高約2～2.5cm、推定稜径14cmを測り、天井部外面2/3の範囲において右回転のヘラ削り調整を、天井部内面、口縁部に丁寧な回転クロナデ調整を施す。天井部から稜部までなだらかに至り、稜を鈍く突出させる。口縁部はやや外反して真直ぐに口縁端部に至る。端部に段をもつ。

坏は2点(52・53)からなる。推定口径は15cm前後、立ち上がり高2cm弱、推定受部径17cm弱～18cmを測り、底部外面2/3の範囲において右回転のヘラ削り調整、底部内面、口縁部に丁寧な回転クロナデ調整を施す。口縁部はやや内傾させながら直立させ、口縁端部に至る。口縁端部に段をもつ。受部はやや鋭く上方へ突き出し、断面は三角形である。

これらの資料は形態的な特徴、法量よりMT15型式段階に位置付けられると思われる。

II 群

坏蓋は15点(24～38)からなる。残存度の低い破片資料であり、法量、形態的な特徴を抽出しがたいが、稜部は天井部と口縁部の境に沈線を施して稜を意識的に作り出した資料と天井部から口縁部に至る屈曲から意識的に稜を作り出した資料とが確認される。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面、口縁部はI群よりさらに丁寧な回転クロナデ調整が施される。

坏は5点(54～58)からなる。推定口径11～13cm、器高5cm弱、立ち上がり高1.2cm～1.8cm、推定受部径12.3cm～15.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ削り調整を、底部内面、口縁部に坏蓋と同様にI群よりさらに丁寧な回転クロナデ調整を施す。底部から受部までやや張りをもちながら緩やかに至り、受部は丸く、かつ鈍く上方へ突き出す。口縁部は内傾しながら緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く鋭く収める。(54)は口縁端部に1本の沈線を持ち、口縁端部の段を意識している。なお、(56)は底部内面に同心円状のスタンプ文を有している。

甗(81)は体部は球状を呈し、頸部を太くし、緩やかに上方へ至る。底部外面に叩き目、頸部中段に細かい波状文をもつ。

これらの資料は形態的な特徴、法量よりTK10古型式段階に位置付けられると思われる。

なお、破片資料であるという資料の制約上、時期を明確にし得なかった資料、かつ、甗、高杯、壺類について、I・II群との製作技法、胎土、焼成等の特徴の共通性よりMT15型式段階からTK10古型式段階までに包括されると思われる。

今回、得られたこれらの資料について、胎土、焼成等の特徴があると思われたため、以下に呈

示する。特に胎土的特徴により2類に分類した。なお、量的には1類が主体を占めている。

1類…胎土は密であり、黒色粗砂～細砂粒を多く含む。これらの黒色砂粒は回転ヘラ削り調整により、コークス状に潰されているものも散見できる。白色砂粒子はあまり含まない。焼成は良好であるが、外面に広く降灰する。

2類…胎土は1類に比べ、さらに緻密であり、1類にみられた黒色砂粒子をほとんど含まない。白色細砂粒、雲母を適度に含んでいる。

ところで、耳川流域においてMT15型式段階からTK217型式段階に属する須恵器が確認される場合、当然のことながら興道寺窯との関連を考慮に含める必要がある。「興道寺窯と獅子塚古墳」といった明確に「供給源と供給先」の関係であるという事実を考えれば、今回得られた資料^{註2}についても本調査地から南方約1.5kmに位置する興道寺窯がその供給源である可能性が指摘できる。

ここで、MT15型式段階からTK10型式段階に属する興道寺窯出土資料と本調査出土資料との比較検討を行った^{註3}。その結果、TK10型式段階資料において特に形態的に類似点が多く、胎土、焼成等における特徴の比較においては、1、2類ともに興道寺窯資料のそれと非常に共通性が高いと思われる。傾向として、興道寺窯出土資料について、本調査出土資料1類に属する胎土の特徴をもつ資料が主体を占めているようである。

この分析によって本調査出土資料は、特に1類に属する資料については興道寺窯に産地を求めることができる可能性が高い。2類に属する資料については形態的に興道寺窯に帰属する可能性もあると思われるが、胎土的特徴から他地域からの搬入品であることも可能性として考えておきたい。形態的に他の資料と差異をもち、かつ、2類に属する胎土の特徴をもつ(93)はその代表的資料である。興道寺古墳群出土資料について、興道寺窯に帰属する資料と帰属しない資料とに区分されているが、この様相は本調査出土資料と同様であると思われる。しかしながら、窯出土資料そのものについて、現状ではその実態がいまいち明らかではないため、これ以上、分析を加えることは差し控えたい。

なお、本調査出土資料1類、あるいは興道寺窯出土資料に一定量みられた胎土中の黒色砂粒子について、コークス状に砕けている状況など、そのあり方は特徴的である。この石材種、岩石名について筆者は不勉強のために知り得ないが、興道寺窯資料を特徴づける胎土的特徴であると思われ^{註5}、今後興道寺窯により生産された須恵器の供給先を追及する上で上記の特徴がメルクマールの1つになり得る可能性をもつ^{註6}。

土師器

大半の資料は5トレンチ、SD1より出土している。器種構成としては甕、椀からなり、甕が圧倒的の主体を占める。

甕類について口縁部の形態より、ヨコナデ調整により成形され、肥厚する口縁部を緩やかに外

反させながら口縁端部を丸く収める1タイプ(117~120、123)、ヨコナデ調整により成形され、口縁部をやや直立気味に外反させながら端部を平らに収め、内面にやや荒いヨコハケ調整を残す2タイプ(122)、ヨコナデ調整により成形され、口縁部を強く横に寝かすように外反させ、内面に細かいヨコハケ調整を残す3タイプ(121、125)、以上3タイプに分類されたが、図化し得なかった資料を含め、1タイプが主体を占めるようである。推定口縁部径は約13cm~25cmを測るものの、各タイプ毎に口縁部径のまとまりはなく、主だった規格性は認められない。

胴部の器面調整として、外面に細かいタテハケ調整、内面は右上方へのヘラ削り調整が施される(124、141)が、図化し得なかった資料を含めて外面にみられるタテハケ調整には粗密がみられ、内面のヘラ削りについても横方向へ施すものも確認されることから概して規格性には乏しい。なお、外面における二次調整は確認されなかった。

明確な規格性には乏しいものの、口縁部をヨコナデ調整によりくの字状に短く外反させ、器面調整として胴部外面にタテハケ、あるいはナナメハケ調整を、内面に横方向、あるいは右上方へ向かってヘラ削り調整を施していることを製作技法における最大公約数的な特徴として挙げる事ができる。いずれも破片資料であるという資料の制約によりその根拠は薄弱であるが、器形は球胴、あるいは中胴状を呈すると思われ、器厚は総じて厚い。

この最大公約数的な製作技法は興道寺古墳群出土土師器甕にみられる製作技法と類似点多く、^{註7} 共伴須恵器との関係により、六世紀初頭~中葉代、耳川流域である当該地におけるある程度普遍的な甕製作技法である可能性は高い。これらの資料はTK10古型式段階並行期、また、漆町遺跡編年における1段階X型式^{註8}15群期に位置付けられると思われる。

椀について、底部からなだらかに立ち上がり、口縁部を肥厚させ、口縁端部を削ることにより平たくしている資料(179)がみられるが、資料数の乏しさから実態はわからない。

ここで、本資料が属する興道寺遺跡と同じ立地条件である耳川左岸中流~下流域に立地する松原製塩遺跡出土の土師器甕(平成6年度調査)、興道寺遺跡出土の土師器甕(平成9年度調査)をそれぞれ7世紀前半代、8世紀前半代の代表的資料として製作技法の観点から比較する。

器面調整について、胴部については外面二次調整の有無といった差異を持ち合わせながらも共通性は高く、6世紀から8世紀まで、若狭から京都北部までの環若狭湾沿岸において通有してみられると思われる、外面にタテハケ調整を、内面に右上方へのヘラ削り調整を施すといったこの技法を伝統的に保持しているようである。

しかし、口縁部の調整に至ると、松原製塩遺跡出土資料では口縁部内面に極めて強いヨコナデによって生じたと思われる3~4条からなる明瞭な凹線を有する段状口縁^{註9}、興道寺遺跡出土資料においては松原製塩遺跡出土資料にみられるほどではないにせよ、それらを退化させたかのようなゆるい段状口縁^{註10}を有し、口縁部の製作技法の変遷が確認される。従って、松原製塩遺跡出土資料の共伴須恵器の年代観よりTK217型式段階には、くの字に短く外反させる6世紀代通有であると思われる口縁製作技法を放棄し、京都北部にその系譜が求められると思われる段状口縁をいち早く採用していることが大きな特徴である。^{註11}

ところで、今回の調査により出土した土師器甕の胎土の特徴としてほとんど全ての個体に礫、雲母が大量に含まれることが挙げられる。雲母が多く含まれる背景として、花崗岩分布域において原材料である粘土の獲得がされたことが挙げられ、これらの資料は花崗岩で構成されている雲谷山を有する耳川上流から中流域の左岸で原材料を入手し、製作された極めて在地性の強い一群であることが想定される。^{註12} 前述したように、本調査資料は形態的にバリエーションが一定ではなく、明確な規格性に乏しいことがこの傍証となろう。

なお、胎土の観点から松原製塩遺跡出土資料、興道寺遺跡出土資料と比較すると、松原製塩遺跡出土資料にはほとんど雲母は認められず、径0.5mmまでの白色細砂粒が含まれる。興道寺遺跡出土土師器甕に含まれる雲母は個体的にも、量的にも極めて少ない現象からして、本調査出土資料に含まれる雲母の量は特異である。

科学的な胎土分析を行っておらず、あくまで肉眼による観察の結果であるため、これ以上の推論は慎むが、甕製作技法に規格性を生じさせる技術の変化、胎土の特徴にみられる変容から6世紀後半から7世紀初頭までのある時期に土師器甕製作にかかわり、1つの画期が存在していた可能性は高い。この時期には興道寺窯の閉窯、興道寺古墳群造営の終焉を迎え、7世紀後半以降の興道廃寺建立を睨んだ国家的勢力の導入に伴う下地づくりともかかわり、耳川流域における当該期の社会構造の変化を伺わせるなど、興味深い様相を呈しているといえよう。

製塩土器

5トレンチ、SD1において出土した製塩土器は浜禰ⅡB式製塩土器1点を除き、全て浜禰ⅡA式製塩土器であった。

製塩土器はいずれも細片であり、全体の器形を把握するには至っていない。浜禰ⅡA式製塩土器について、胎土は極めて緻密であり、全く砂礫を含まない。雲母を含む個体も若干みられるが、その混入量はごく少量である。器厚はいずれも、1～2mm内に収まり、内外面は摩滅が激しく、全く調整痕は確認できない。色調は橙色、にぶい黄橙色を呈する。

近辺では、三方町田名遺跡に類例を求めることができる。^{註13}

浜禰ⅡB式製塩土器については、器厚を約5mmとし、橙色を呈する。胎土は緻密であるが、径1mm程の粗砂、あるいは雲母を多く含む。内外面は摩滅し、調整痕は認められない。

かつてより当該地において、浜禰ⅡA式製塩土器の表採が知られていたが、明確に遺構に伴っての出土ははじめてである。共伴する須恵器はTK10古型式が主体を占めることから、TK10古型式段階に伴うものと考えられ、入江氏の指摘にある浜禰ⅡA式製塩土器の存在はTK10型式段階までであることに合致する。^{註14}^{註15}

既に報告したように、当該地において奈良期に属する製塩土器が多く確認されており、焼塩が行われた可能性を含め、ある程度大規模に土器製塩に関連していたようである。今回の浜禰ⅡA式製塩土器の出土により、当該地における土器製塩との関わりが6世紀代まで確実に遡ったこと

となり、当該地を取り巻く歴史的環境を考慮すれば、6世紀から8世紀までの長期間、土器製塩に関わることに大きな疑問はないと思われる。これにかかわり、当然、耳川の水運により支えられた流通があったことは自明である^{註16}。

ただ、長期間に渡る一連の土器製塩との関わりにおいて、海岸部から数キロメートルの距離を隔てた内陸部に位置する当該地において、どこまで煎熬、あるいは焼塩工程に関わったかは現段階では不明であり、当該地が中継地的存在であったのか否かも含めて、今後の調査の進展を待ちたい。

註1 京都国立博物館、久保智康氏のご教示による。

註2 三辻利一「古代土器の産地推定法」『考古学ライブラリー14』1983年、中村浩「福井県美浜町所在獅子塚古墳出土須恵器について 東京国立博物館列品の再検討」『MUSEUM501』1992年による。

註3 興道寺窯出土資料については概報等により紹介されているものの、未だ正式な報告がなされておらず、出土資料も実見することができない現状から、すでに公となっている報告（森川・入江「興道寺窯跡の試掘調査」『福井県埋蔵文化財調査報告第3集 重要遺跡緊急確認調査報告（Ⅱ）』1979年、美浜町教育委員会『興道寺窯跡発掘調査概報』1979年）、あるいは福井県立若狭歴史民俗資料館において常設展示されている資料、興道寺窯発掘調査地周辺より現在、採集される資料等から諸特徴を抽出した。

なお、この分析については、とかく窯操業時のMT15型式段階の須恵器について主に関心が払われていた学史を振り返り、MT15型式段階以降の興道寺窯産と思われる須恵器について分析を加えることにより、興道寺窯資料にアプローチすることをその目的としたものである。

註4 註2と同じ。

註5 敦賀市・衣掛山古墳群出土資料、美浜町・松原製塩遺跡出土資料、三方町・きよし野古墳群出土資料を実見した限り、本調査出土資料と興道寺窯出土資料の共通性、類似性は見出せなかった。資料実見に際し、敦賀短期大学・網谷氏、敦賀市教育委員会・川村氏、三方町立郷土資料館・青池氏にご配慮に感謝する。

なお、ここでは触れられないが、筆者が実見した限り、美浜町、三方町両域において、主に古墳の副葬品として出土している資料に興道寺窯産と思われる資料がみられた。

註6 若狭を含めた他地域における同時期の須恵器窯出土資料との比較検討が必要であろうか。

註7 山口 充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井県考古学会会誌第2号』 福井県考古学会 1984年による。

註8 石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡Ⅰ』1986年による。

註9 敦賀短期大学、網谷氏のご好意により、現在、整理中の資料を実見させていただいた。記して感謝申し上げます。

註10 美浜町教育委員会『興道寺遺跡』1998年による。

註11 いわゆる「段状口縁」と称される口縁部を有する土師器甕について、若狭においてはその発生、及びその後の展開などその実態は明らかとなっていない。今後の調査例の増加により、当然、6世紀代にその発生が認められることもあり得るため、本文中で述べた6世紀から8世紀までの大まかな形態等の変遷は耳

川流域における様相の一端と現段階では捉えておきたい。

註12 三方町立郷土資料館、青池氏のご教示によれば、当該地同様に雲谷山を背後にもつ三方町域内における当該期、土師器甕についても当該地同様にその胎土に雲母が大量に含まれるとのことである。

註13 三方町教育委員会『三方町文化財調査報告書第8集 田名遺跡』1988年による。

註14 註13と同じ。

註15 入江文敏「古墳時代土器製塩の画期と首長墓の動向」『横田健一先生古稀記念文化史論叢 上』1987年による。しかしながら、本調査においては共伴資料のあり方から浜瀬ⅡA式製塩土器がMT15型式段階の須恵器と共伴している可能性は否定できず、可能性として地域差が反映され、MT15型式段階には浜瀬ⅡA式製塩土器の存在が終焉していることも考えられる。今後、当該地を含めた若狭東部における調査の動向に注目したい。

註16 美浜町教育委員会が平成10年度に実施している耳川流域における遺跡分布範囲詳細確認調査により、当該地が位置する河岸段丘東、段丘直下の扇状地上において浜瀬ⅡA式、ⅡB式、船岡式製塩土器破片、あるいは平安期に属すると思われる製塩土器支脚が採集されている。段丘上からの遺物の投棄により遺物包含層が段丘下に形成されている可能性は高いが、当該地における継続的な土器製塩の関わりを考える上で興味深い。

なお、この調査により耳川右岸に立地する穴田遺跡、流田遺跡、秋名古遺跡、末国遺跡の範囲内、あるいは付近（現在の木野～麻生）から浜瀬ⅡB式期から船岡式期に属する製塩土器片が採集されている。これまでのところ、耳川右岸からはほとんど製塩土器の出土、採集が知られておらず、耳川右岸域においてもある程度継続的に土器製塩に関わった様相の一端を確認することができる。

以上が今回の試掘調査の報告である。調査範囲、調査期間が限られた中で興道廃寺そのものの実態を把握することは困難であり、結果として興道廃寺そのものについては何ら手がかりを得ることができなかった。しかしながら、古墳時代後期の遺構、遺物の確認により当該地における古墳時代後期に属する集落の一部を垣間見ることができ、予想外の成果を挙げることもできた。

なお、本報告の記述をすすめるにあたり、事実誤認をしている点もあろうかと思われる。諸先生方の厳しい御指導、御教示を賜りたい。

最後に、優秀な学生を派遣して頂いた泉拓良、植野浩三、山中章、網谷克彦各諸先生方、また調査に対し、暖かく、時には厳しく御指導下さった調査指導の諸先生方はじめ、調査にかかわられた多くの皆様の御指導、御尽力に深く感謝する次第である。

表2 出土遺物観察一覽

番号	遺物名称	出土位置・層位	口径	器高	その他	整形・調整	残存率	特記事項	年代観
1	C 壺	4 Tr. SD1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	黄灰色、黒色砂粒若干含む	6世紀
2	C 坏	4 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	受部細片	灰黄色、釉子含む	6世紀中葉
3	E 壺	4 Tr. SD1				内面右上方へう削り	胴部破片	淡黄褐色、砂粒・黒母多く含む、胎土密	6世紀
4	E 壺	4 Tr. SD2				内面右上方へう削り	胴部破片	明黄褐色、白色砂・黒母若干含む、胎土密	6世紀
5	E 不明	4 Tr. SK1					細片	にぶい褐色、胎土密	
6	E 不明	4 Tr. SK1					細片	灰黄色、白色砂・黒母多く含む、胎土密	
7	C 壺	4 Tr. SK2				外面平行文印き、内面同心円文当て具ナデ消し	胴部破片	青灰色、白色釉子含む	6世紀
8	E 壺	4 Tr. SK2				内外面ヨコナデ	口縁破片	明赤褐色、砂粒・黒母多く含む、胎土密	6世紀
9	C 坏	4 Tr. SK3	(19.6)	(3.4)		内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白色砂若干含む、胎土密	平安期
10	E 皿	4 Tr. SK3	(13.4)	(2.8)		内外面口口整形	口縁破片	明褐色、黒母若干含む、胎土密	平安期
11	E 皿	4 Tr. SK3				内外面口口整形	口縁破片	にぶい黄褐色、黒母若干含む、胎土密	平安期
12	E 壺	4 Tr. SK3				内外面ヨコナデ、内外面ヨコナデ	口縁破片	明褐色、黒母若干含む、胎土密	
13	E 不明	4 Tr. SK3					細片	にぶい黄褐色、胎土密	
14	E 不明	4 Tr. SK3					細片	にぶい黄褐色、胎土密	
15	E 不明	4 Tr. SK3					細片	にぶい黄褐色、胎土密	
16	T 平瓦	4 Tr. 表土				凸面ナデ、凹面布目痕	細片	青灰色、白色砂粒若干含む、胎土密	7世紀後葉
17	E 高坏	4 Tr. 攪乱層		(5.1)			脚部1/2	にぶい黄褐色、白色砂粒・黒母・黒多く含む	6世紀
18	C 壺	4 Tr. 攪乱層				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰黄色、白色砂含む、胎土密	6世紀
19	C 坏蓋	5 Tr. SD1	(15.0)	4.7	口縁部高2.6 口径(14.0)	天井部外面2/3右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	3/4	暗青灰~灰色、黒色砂粒含む、胎土密	MT15形式
20	C 坏蓋	5 Tr. SD1	(14.8)	4.8	口縁部高2.3 口径(14.2)	天井部外面2/3右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	1/2	灰色、黒色砂粒含む、胎土密	MT15形式
21	C 坏蓋	5 Tr. SD1	(14.8)	(4.3)	口縁部高2.4 口径(14.4)	天井部外面2/3右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	1/8	灰色、黒色砂粒含む、胎土密	MT15形式
22	C 坏蓋	5 Tr. SD1		(2.5)	口縁部高2.1	内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、黒色砂粒含む、胎土密	MT15形式
23	C 坏蓋	5 Tr. SD1			口縁部高1.9	内外面回転口ロナデ	口縁破片	青灰色、白色砂粒含む、胎土密	MT15形式
24	C 坏蓋	5 Tr. SD1		(2.3)		天井部外面回転へう削り、2本の沈線 内外面回転口ロナデ、内面一部布目痕	天井1/4	青灰色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
25	C 坏蓋	5 Tr. SD1			口縁部高2.4	内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
26	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰白色、黒・白色砂多く含む、胎土密	TK10形式
27	C 坏蓋	5 Tr. SD1			口縁部高2.3	内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰白色、黒色砂粒含む、胎土密	TK10形式
28	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	稜部細片	灰色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
29	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	黒色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
30	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	稜部細片	黒色、白色砂粒含む	TK10形式
31	C 坏蓋	5 Tr. SD1	(14.0)	(3.2)		内外面回転口ロナデ	口縁1/4	黒青灰色、白色砂粒多く含む、胎土密	TK10形式
32	C 坏蓋	5 Tr. SD1		(3.8)		天井部外面左回転へう削り 内外面回転口ロナデ	口縁1/4	黒青灰色、白色砂粒含む	TK10形式
33	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井・ 口縁破片	青灰色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
34	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰オリーブ色、白色砂粒含む	TK10形式
35	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	稜部破片	灰色、黒色砂粒含む	TK10形式
36	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	稜部破片	灰色、黒色砂粒含む	TK10形式
37	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	青灰色、白色砂粒含む、胎土密	TK10形式
38	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	黒色、白色砂粒含む	TK10形式
39	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白色砂粒含む	6世紀
40	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰黄色、黒色砂粒含む	6世紀
41	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰白色、白色砂粒含む	6世紀
42	C 坏蓋	5 Tr. SD1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰白色、白色砂粒含む	6世紀
43	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰黄色、黒色砂粒含む	6世紀
44	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、黒色砂粒含む	6世紀
45	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、黒色砂粒含む	6世紀
46	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白色砂粒含む	6世紀
47	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、黒色砂粒含む	6世紀
48	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白色砂粒含む	6世紀
49	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色	6世紀
50	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白色砂粒若干含む	6世紀
51	C 坏蓋	5 Tr. SD1				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白色砂粒含む	6世紀
52	C 坏	5 Tr. SD1	(14.8)	(4.5)	立上り高1.9 受付口径(16.8)	底面外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	口縁1/6	灰色、黒色砂粒含む、胎土密	MT15形式

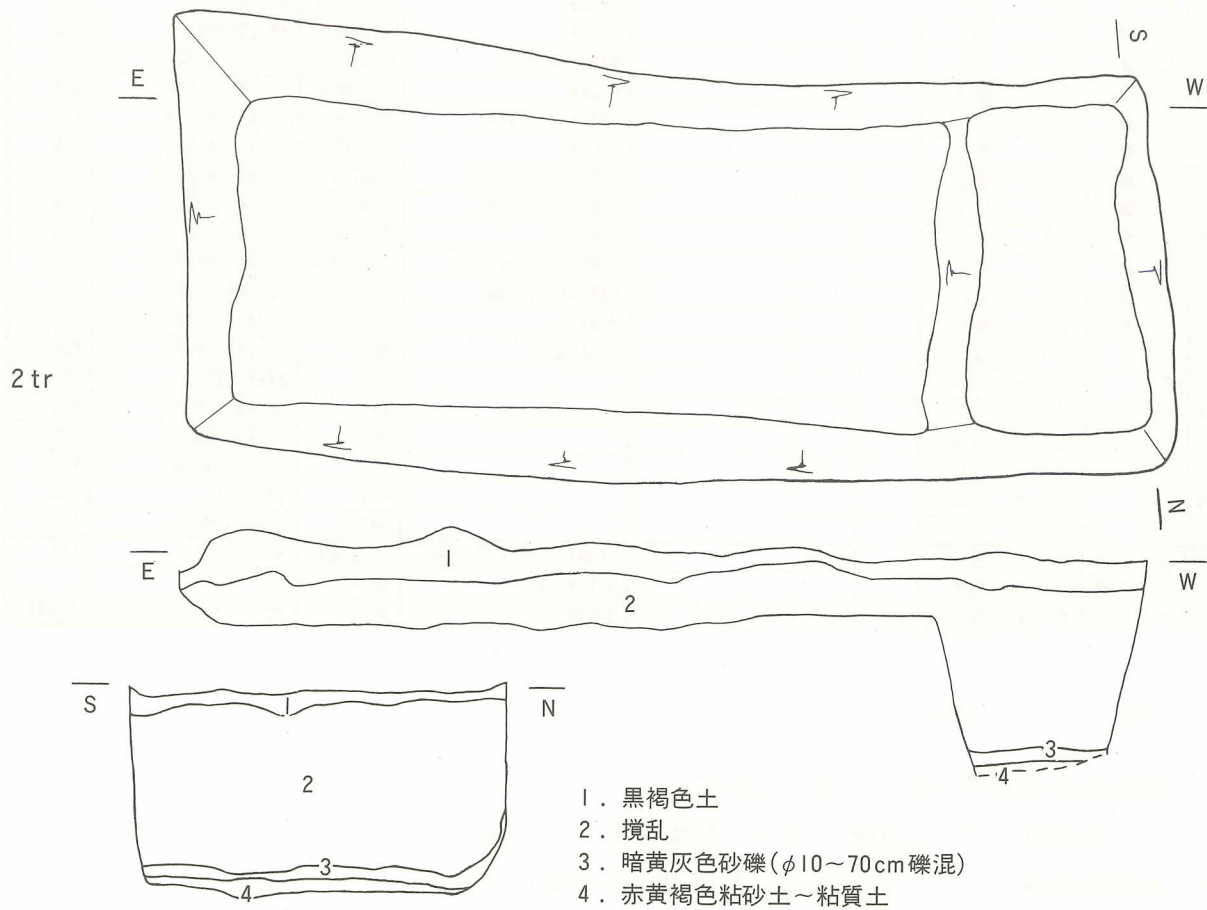
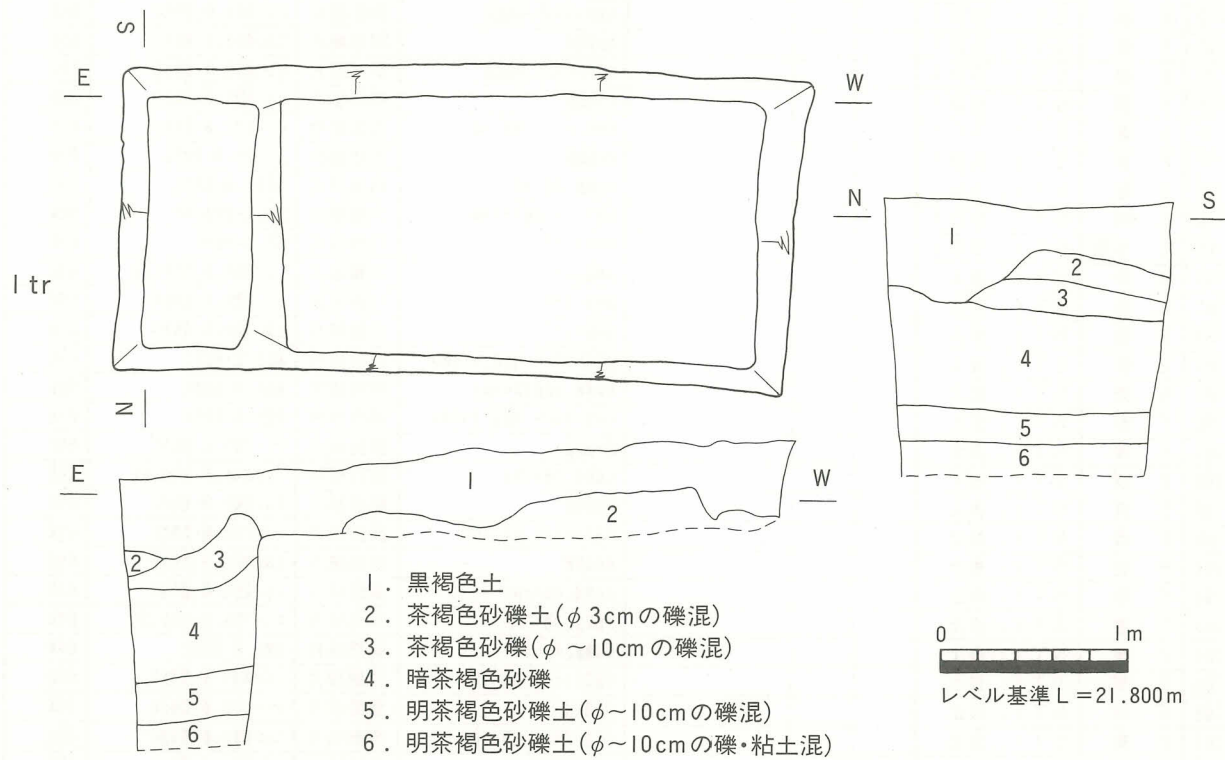
番号	遺物名称	出土位置・層位	口径	器高	その他	整形・調整	残存率	特記事項	年代観
53	C 坏	5 Tr. SD 1	(15.4)	(3.9)	立上り高1.8 受付部径(18.0)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	口縁1/8	灰色、白色砂礫含む	MT15形式
54	C 坏	5 Tr. SD 1	(11.7)	(4.5)	立上り高1.8 受付部径(12.3)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	口縁1/4	灰色、黒色砂礫含む	TK10形式
55	C 坏	5 Tr. SD 1	(11.0)	4.6	立上り高1.3 受付部径(13.3)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	1/2	灰色、黒色砂礫含む	TK10形式
56	C 坏	5 Tr. SD 1	(12.7)	4.9	立上り高1.2 受付部径(14.8)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ、内面同心円状当て具痕	1/3	青灰色、黒色砂礫、裏面含む、胎土緻密	TK10形式
57	C 坏	5 Tr. SD 1	(13.0)	(4.5)	立上り高1.6 受付部径(14.8)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	口縁1/8	灰色、白色砂礫含む	TK10形式
58	C 坏	5 Tr. SD 1	(13.0)	(2.0)	立上り高1.5 受付部径(15.2)	内外面回転口ロナデ	口縁1/8	灰色	TK10形式
59	C 坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	青灰色	6世紀
60	C 坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	青灰色	6世紀
61	C 坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	暗青灰色	6世紀
62	C 坏	5 Tr. SD 1				底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井1/3	灰色、白・黒色砂礫含む、坏蓋?	6世紀
63	C 坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色	6世紀
64	C 坏	5 Tr. SD 1				底部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色	6世紀
65	C 坏	5 Tr. SD 1				底部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰白色、黒色砂礫含む	6世紀
66	C 坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	受部破片	灰白色、黒色砂礫含む	6世紀
67	C 壺	5 Tr. SD 1		(16.0)		外面平行文印きカキメ、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰白色、黒含む	6世紀
68	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印きカキメ、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰黄色、黒・裏面含む	6世紀
69	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰黄色、白色砂礫含む	6世紀
70	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
71	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色	6世紀
72	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰黄色	6世紀
73	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
74	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色、黒色砂礫含む	6世紀
75	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
76	C 壺	5 Tr. SD 1				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰色、黒色砂礫含む	6世紀
77	C 壺	5 Tr. SD 1		(9.8)		外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	黒色、白色砂礫含む	6世紀
78	C 壺	5 Tr. SD 1	(12.4)	(5.8)	頸部径(9.8)	内外面回転口ロナデ	口縁1/4	黒色、黒・白色砂礫含む	6世紀
79	C 壺	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
80	C 短頸壺	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	頸部破片	灰色、黒色砂礫含む	6世紀
81	C 瓦甗	5 Tr. SD 1		(10.5)	頸部径6.1、体部径9.0	外面体部回転へう削り、印き目十字消し 外面頸部波状文、内外面回転口ロナデ	1/2	灰色、黒・白色砂礫多く含む	TK10形式
82	C 高坏	5 Tr. SD 1		(8.1)	底径(7.2)	内外面回転口ロナデ	胴部1/4	暗青灰色	6世紀
83	C 高坏	5 Tr. SD 1				内外面回転口ロナデ	口縁破片	暗青灰色、白色砂礫含む	6世紀
84	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
85	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色	6世紀
86	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰黄色、白色砂礫含む	6世紀
87	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	稜部破片	黒色	6世紀
88	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	稜部破片	灰色	6世紀
89	C 坏蓋	5 Tr. 表土				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白・黒色砂礫含む	6世紀
90	C 坏蓋	5 Tr. 表土				天井部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	天井破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
91	C 坏蓋	5 Tr. 表土				天井部外面へう削り、内外面回転口ロナデ	天井破片	黒色	6世紀
92	C 坏蓋	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	つまみ部	灰色、白色砂礫含む	奈良期
93	C 坏	5 Tr. 表土	(12.2)	5.1	立上り高1.2 受付部径(15.1)	底部外面右回転へう削り 内外面回転口ロナデ	1/2	灰色、黒色砂礫含む	TK10形式
94	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色、白・黒色砂礫含む	6世紀
95	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色	6世紀
96	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	受部破片	灰色	6世紀
97	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	受部破片	灰白色	6世紀
98	C 坏	5 Tr. 表土				底部外面回転へう削り、内外面回転口ロナデ	底部破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
99	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	底部破片	灰色、白色砂礫含む	6世紀
100	C 坏	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	底部破片	灰色、白色砂礫若干含む	6世紀
101	C 壺	5 Tr. 表土				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰白色、白色砂礫含む	6世紀
102	C 壺	5 Tr. 表土				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰白色、黒色砂礫若干含む	6世紀
103	C 壺	5 Tr. 表土				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	にぶい橙色	6世紀
104	C 壺	5 Tr. 表土				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰黄色	6世紀
105	C 壺	5 Tr. 表土				外面平行文印き、内面同心円文当て具痕	胴部破片	灰白色	6世紀
106	C 壺	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	口縁破片	灰色	6世紀

番号	遺物名称	出土位置・層位	口径	器高	その他	整形・調整	残存率	特記事項	年代観
107	C 不明	5 Tr. 表土				外面回転ヘラ削り、内外面回転口ロナデ	破片	青灰色、白色砂粒含む	6世紀
108	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰黄色	6世紀
109	C 不明	5 Tr. 表土				外面回転ヘラ削り、内面剥離	破片	灰色	6世紀
110	C 不明	5 Tr. 表土				外面回転ヘラ削り、内面回転口ロナデ	破片	灰色、黒色砂粒含む	6世紀
111	C 不明	5 Tr. 表土				外面回転ヘラ削り、内面回転口ロナデ	破片	灰色	6世紀
112	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰色	6世紀
113	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰色	6世紀
114	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰色	6世紀
115	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰色、黒色砂粒含む	6世紀
116	C 不明	5 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	破片	灰白色、黒色砂粒含む	6世紀
117	E 壺	5 Tr. SD1	(16.0)	(3.4)	頸部径(14.0)	内外面ヨコナデ	口縁1/4	にぶい褐色、黒・曇母含む	6世紀
118	E 壺	5 Tr. SD1	(21.2)	(3.8)	頸部径(17.8)	内外面ヨコナデ	口縁1/8	暗褐色、曇母多く含む	6世紀
119	E 壺	5 Tr. SD1	(20.8)	(2.5)		内外面ヨコナデ	口縁1/8	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
120	E 壺	5 Tr. SD1	(24.6)	(3.5)	頸部径(23.3)	内外面ヨコナデ	口縁1/8	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
121	E 壺	5 Tr. SD1	(19.0)	(1.8)		内外面ヨコナデ、内面細かいヨコハケ	口縁1/8	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
122	E 壺	5 Tr. SD1	(17.8)	(3.6)		内外面ヨコナデ、内面細かいヨコハケ	口縁1/8	褐色、黒・曇母含む	6世紀
123	E 壺	5 Tr. SD1	(13.2)	(2.7)		内外面ヨコナデ	口縁1/8	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
124	E 壺	5 Tr. SD1				口縁部ヨコナデ、 胴部外面タテハケ、内面右上方ヘラ削り	口縁・ 胴部破片	にぶい褐色、黒・曇母含む	6世紀
125	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ、内面細かいヨコハケ	口縁破片	褐色、黒・曇母含む	6世紀
126	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
127	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
128	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
129	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
130	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
131	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
132	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
133	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
134	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
135	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
136	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	褐色、黒・曇母含む	6世紀
137	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
138	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
139	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	褐色、黒・曇母含む	6世紀
140	E 壺	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
141	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面右上方ヘラ削り	頸部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
142	E 壺	5 Tr. SD1				外面ヨコナデ、内面右上方ヘラ削り	頸部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
143	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面右上方ヘラ削り	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
144	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面右上方ヘラ削り	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
145	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面右上方ヘラ削り	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
146	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
147	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面ヘラ削り	胴部破片	明褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
148	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面右上方ヘラ削り	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
149	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面ヘラ削り	胴部破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
150	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面右上方ヘラ削り	胴部破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
151	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面ヘラ削り	底部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
152	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面磨滅	胴部破片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
153	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨滅	胴部破片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
154	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨滅	胴部破片	にぶい赤褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
155	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ハケメ	胴部細片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
156	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	黄褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
157	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい赤褐色、黒・曇母多く含む	6世紀
158	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面磨滅	胴部細片	にぶい赤褐色、黒・曇母含む	6世紀
159	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい赤褐色、黒・曇母含む	6世紀
160	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
161	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨滅	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
162	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
163	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨滅	胴部細片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
164	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	暗灰黄色、黒・曇母含む	6世紀
165	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面ヘラ削り	胴部細片	黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
166	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨滅	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
167	E 壺	5 Tr. SD1				外面細かいタテハケ、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
168	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
169	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀
170	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨滅、内面ヘラ削り	胴部細片	にぶい黄褐色、黒・曇母含む	6世紀

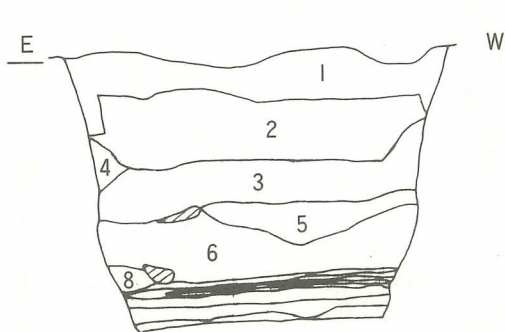
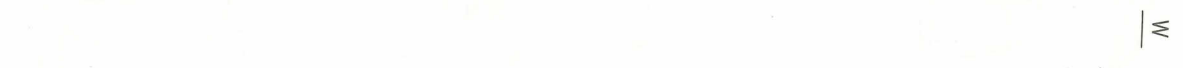
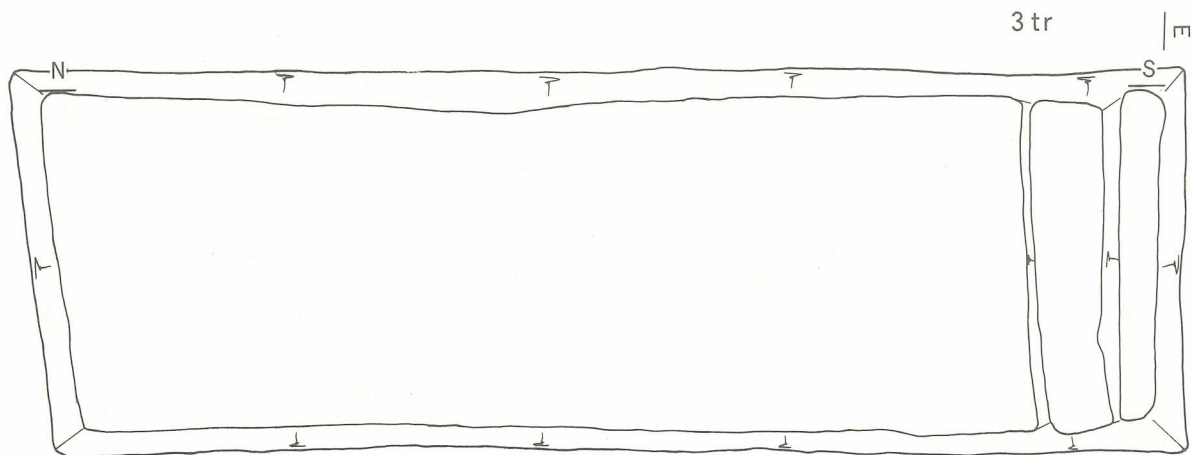
番号	遺物名称	出土位置・層位	口径	器高	その他	整形・調整	残存率	特記事項	年代観
171	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面へう削り	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
172	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面磨減	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
173	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨減	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
174	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面磨減	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
175	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨減	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
176	E 壺	5 Tr. SD1				外面荒いタテハケ、内面へう削り	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
177	E 壺	5 Tr. SD1				内外面磨減	胴部細片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
178	E 壺	5 Tr. SD1				外面磨減、内面へう削り	胴部細片	明赤褐色、礫・雲母含む	6世紀
179	E 椀	5 Tr. SD1				外面ヨコナデ、内面ヨコへう削り	口縁破片	褐色、礫・雲母多く含む	6世紀
180	E 不明	5 Tr. SD1				内外面ヨコナデ	口縁破片	褐色、礫・雲母含む	6世紀
181	E 壺	5 Tr. 表土				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、礫・雲母多く含む	6世紀
182	E 壺	5 Tr. 表土				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
183	E 壺	5 Tr. 表土				内外面ヨコナデ	口縁破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
184	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面右上方へう削り	胴部破片	黒褐色、礫・雲母含む	6世紀
185	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面右上方へう削り	胴部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
186	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面右上方へう削り	胴部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
187	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	オリーブ褐色、礫・雲母含む	6世紀
188	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母多く含む	6世紀
189	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
190	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
191	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
192	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
193	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	オリーブ褐色、礫・雲母多く含む	6世紀
194	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
195	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
196	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	オリーブ褐色、礫・雲母含む	6世紀
197	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
198	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
199	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
200	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
201	E 壺	5 Tr. 表土				外面磨減、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
202	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	オリーブ褐色、礫・雲母含む	6世紀
203	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
204	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
205	E 壺	5 Tr. 表土				外面細かいタテハケ、内面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
206	E 壺	5 Tr. 表土				外面細かいタテハケ、内面磨減	胴部破片	オリーブ褐色、礫・雲母含む	6世紀
207	E 壺	5 Tr. 表土				内外面ヨコナデ	頸部破片	黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
208	E 壺	5 Tr. 表土				外面細かいタテハケ、内面へう削り	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
209	E 壺	5 Tr. 表土				外面荒いタテハケ、内面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母含む	6世紀
210	E 壺	5 Tr. 表土				内外面磨減	胴部破片	にぶい黄褐色、礫・雲母多く含む	6世紀
211	ES	5 Tr. SD1				内面細かいヨコハケ	細片	にぶい黄褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
212	ES	5 Tr. SD1					細片	淡黄褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
213	ES	5 Tr. SD1					細片	にぶい黄褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
214	ES	5 Tr. SD1					細片	にぶい黄褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
215	ES	5 Tr. SD1					細片	にぶい褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
216	ES	5 Tr. SD1					細片	褐色、浜礫ⅡA式	6世紀
217	ES	5 Tr. SD1					細片	にぶい褐色、浜礫ⅡB式	6世紀
218	C 高坏	6 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ、外面2本の沈線	口縁破片	灰白色、黒色砂粒含む	6世紀
219	C 不明	6 Tr. 表土				内外面回転口ロナデ	細片	灰色	
220	T 平瓦	6 Tr. 表土				凹面布目瓦	細片	褐色	7世紀後半

凡 例

1. 遺物名の各記号は次のとおりである。
C：須恵器、E：土師器、ES：製塩土器、T：瓦
2. 各遺物法量の（ ）は推定径、及び現存高を表している。
3. 遺物観察一覧の計測値はcmである。
4. 遺物番号は実測図の番号と一致する。
5. 遺物観察一覧中「特記事項」の遺物色調は標準土色帳による。

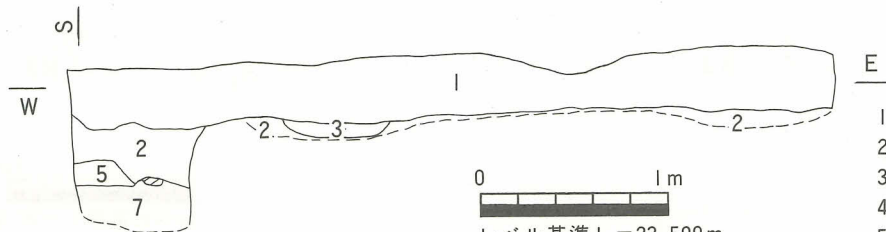
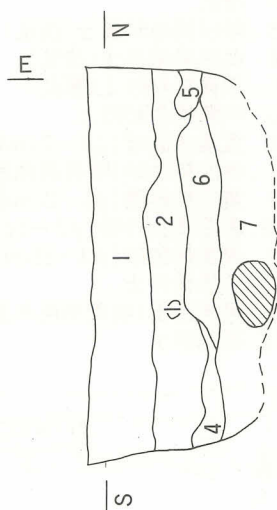
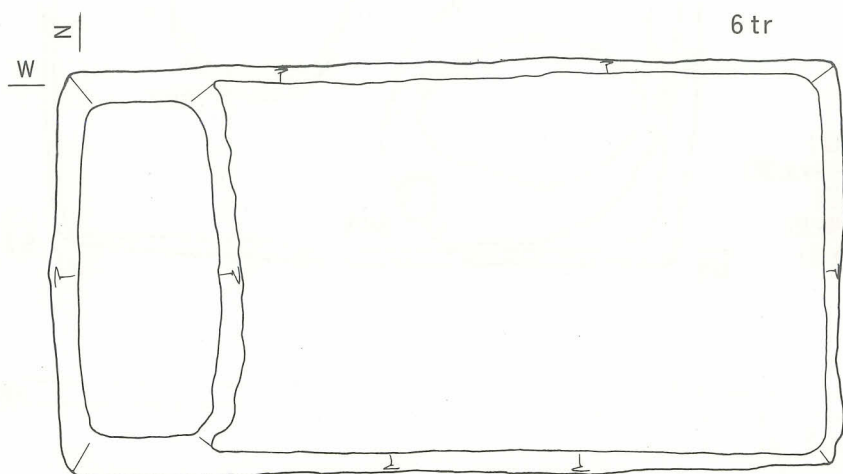


第3図 1・2トレンチ遺構図(上：1トレンチ、下：2トレンチ)



1. 黒褐色土
2. 攪乱
3. 暗黄茶褐色砂礫
4. 黄茶褐色粘砂土(黒褐色土混)
5. 黒褐色砂礫
6. 暗黄灰色砂礫~砂礫(φ2~5cm礫)
7. 明黒褐色ブロック
8. 黄褐色粘砂土(礫混)
9. 暗黄褐色粘質土

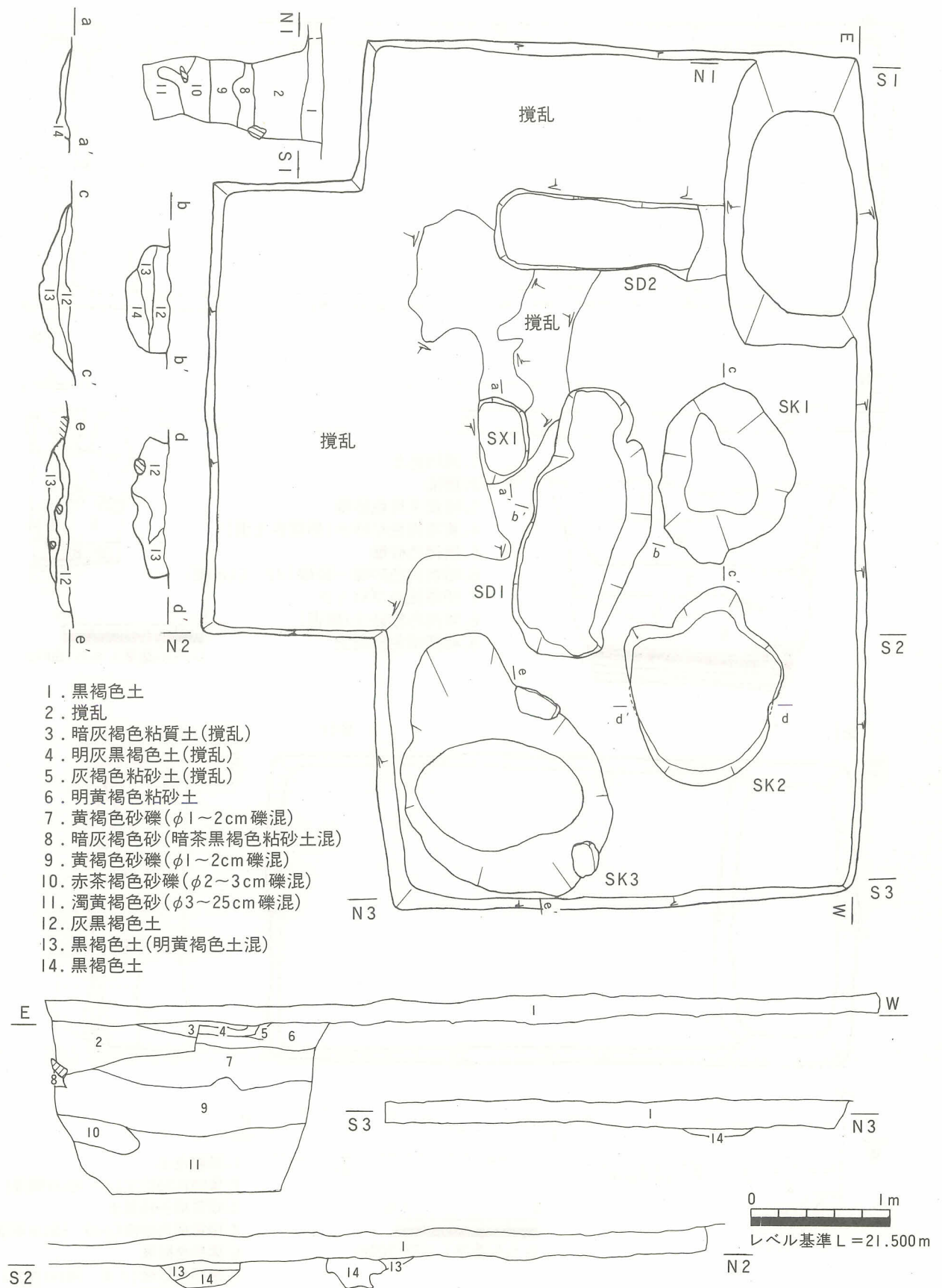
0 1 m
レベル基準 L = 21.800m



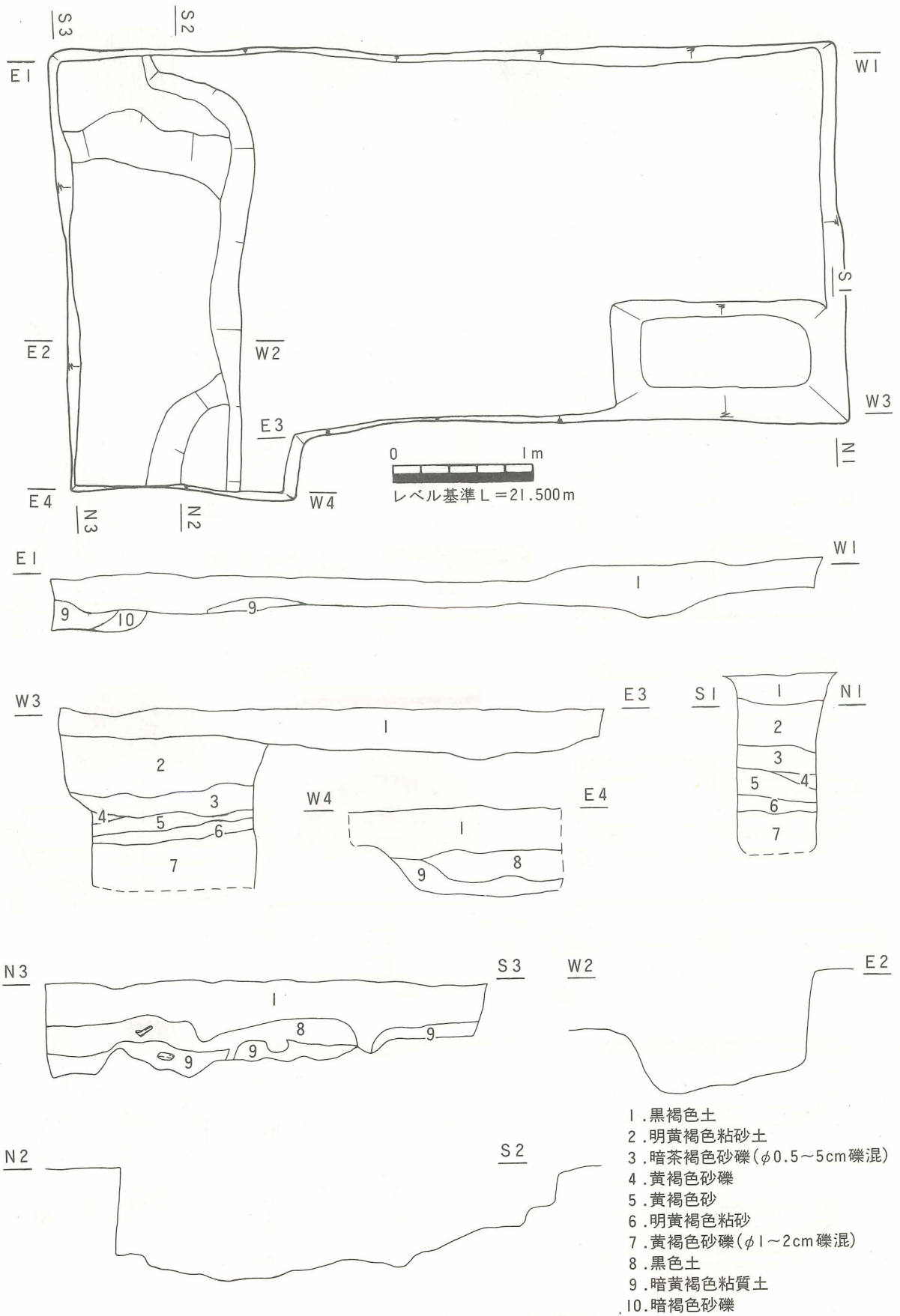
1. 黒褐色土
2. 黄褐色粘砂土(φ~10cm礫混)
3. 暗茶褐色粘質土
4. 暗黄褐色砂礫(φ10~50cm礫混)
5. 黒褐色砂礫
6. 黒褐色砂礫(φ10~70cm礫混)
7. 黄褐色砂礫(φ10~40cm礫混)

0 1 m
レベル基準 L = 23.500m

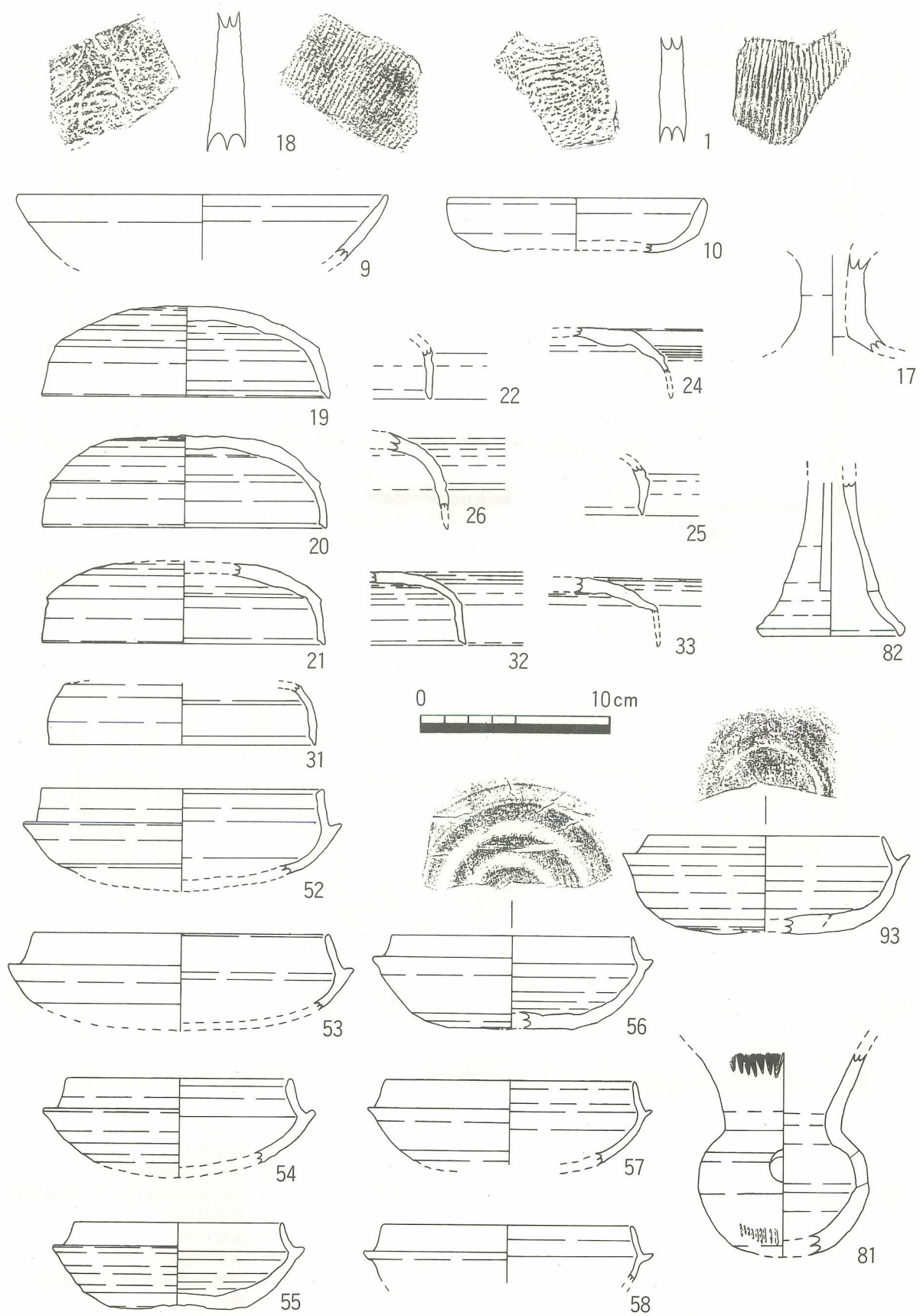
第4図 3・6トレンチ遺構図(上: 3トレンチ、下: 6トレンチ)



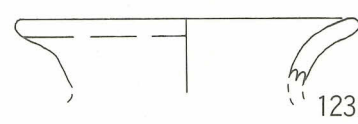
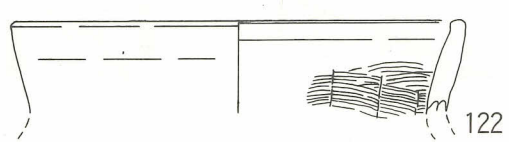
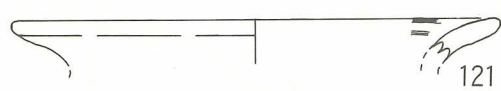
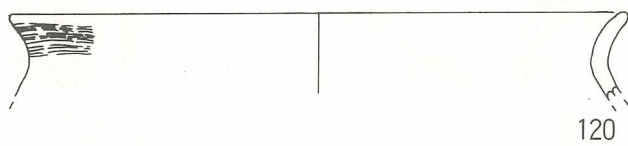
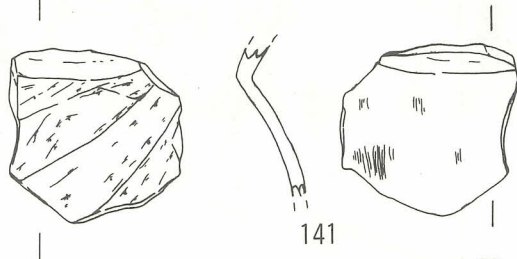
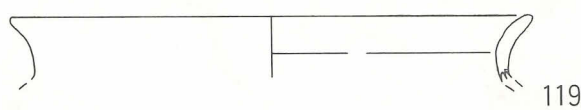
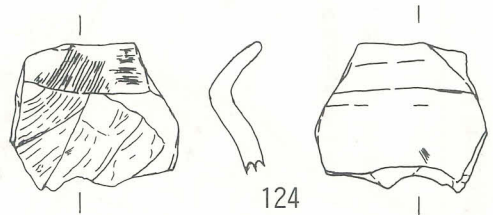
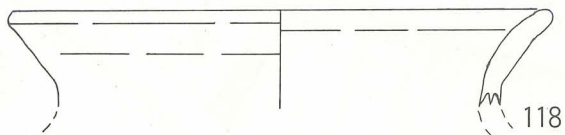
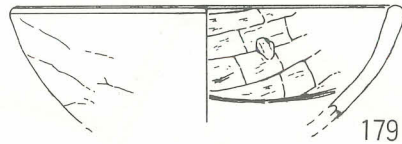
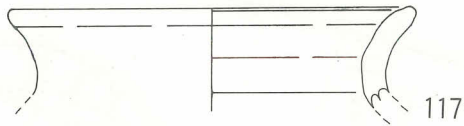
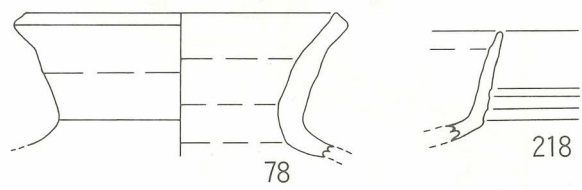
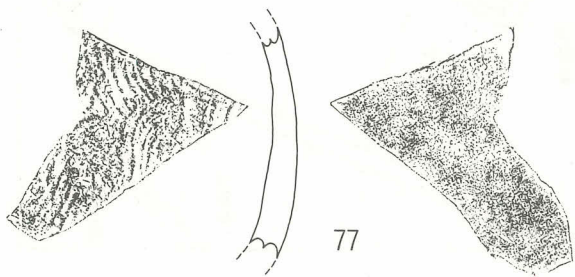
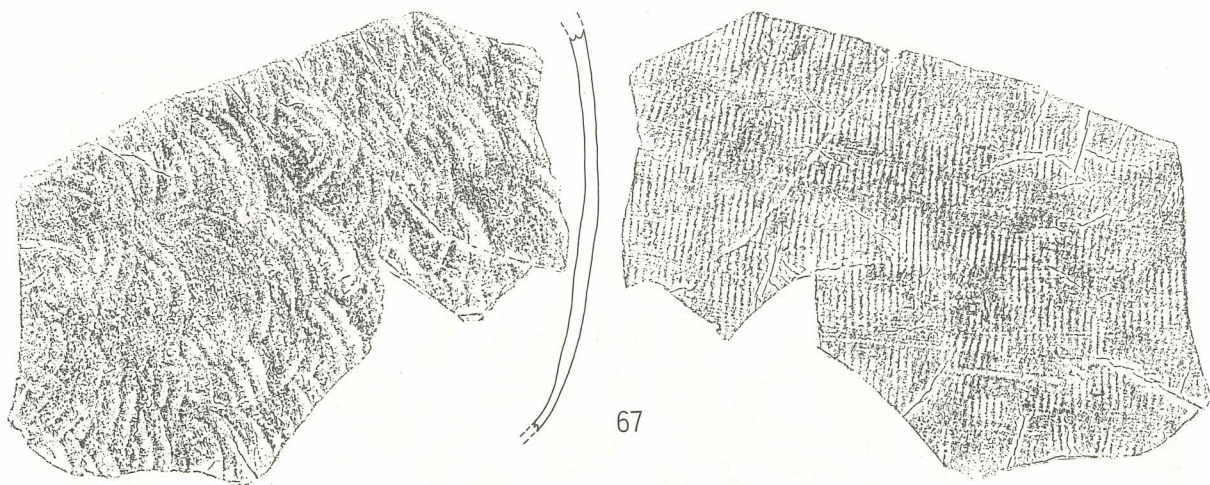
第5図 4トレンチ遺構図



第6図 5トレンチ遺構図



第7図 出土遺物図1



第8图 出土遺物图2

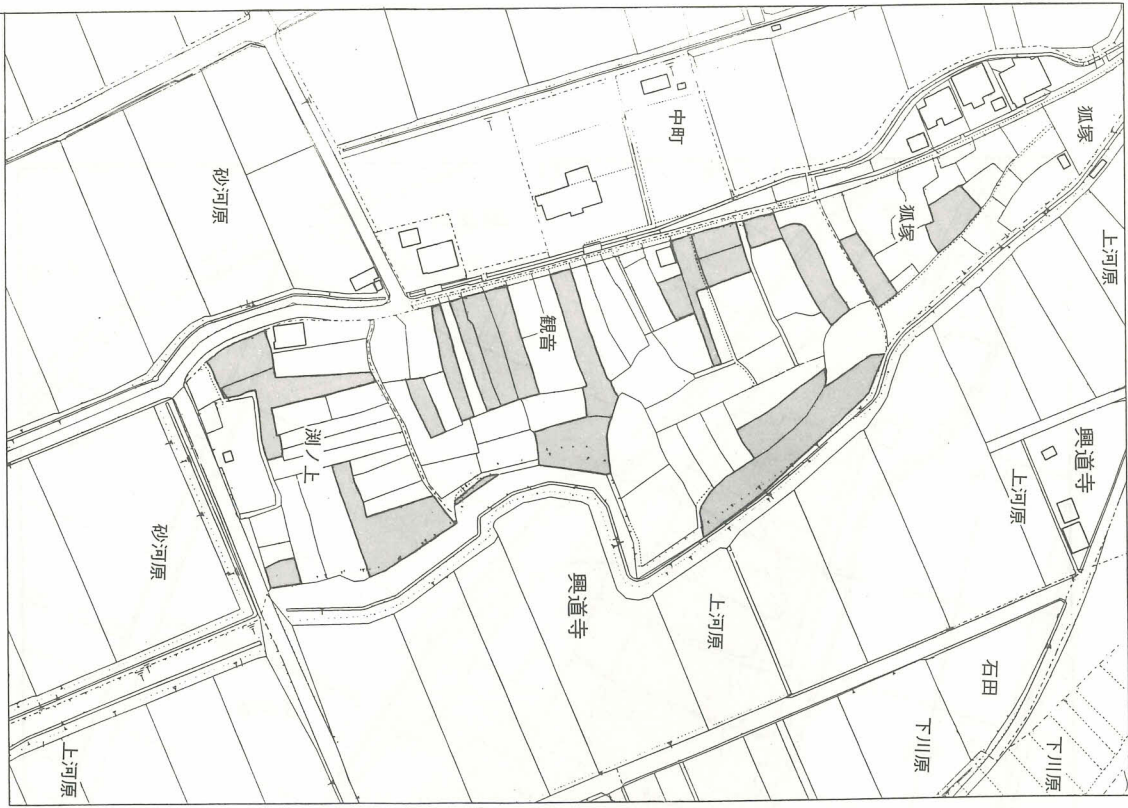
6世紀以前の遺物分布



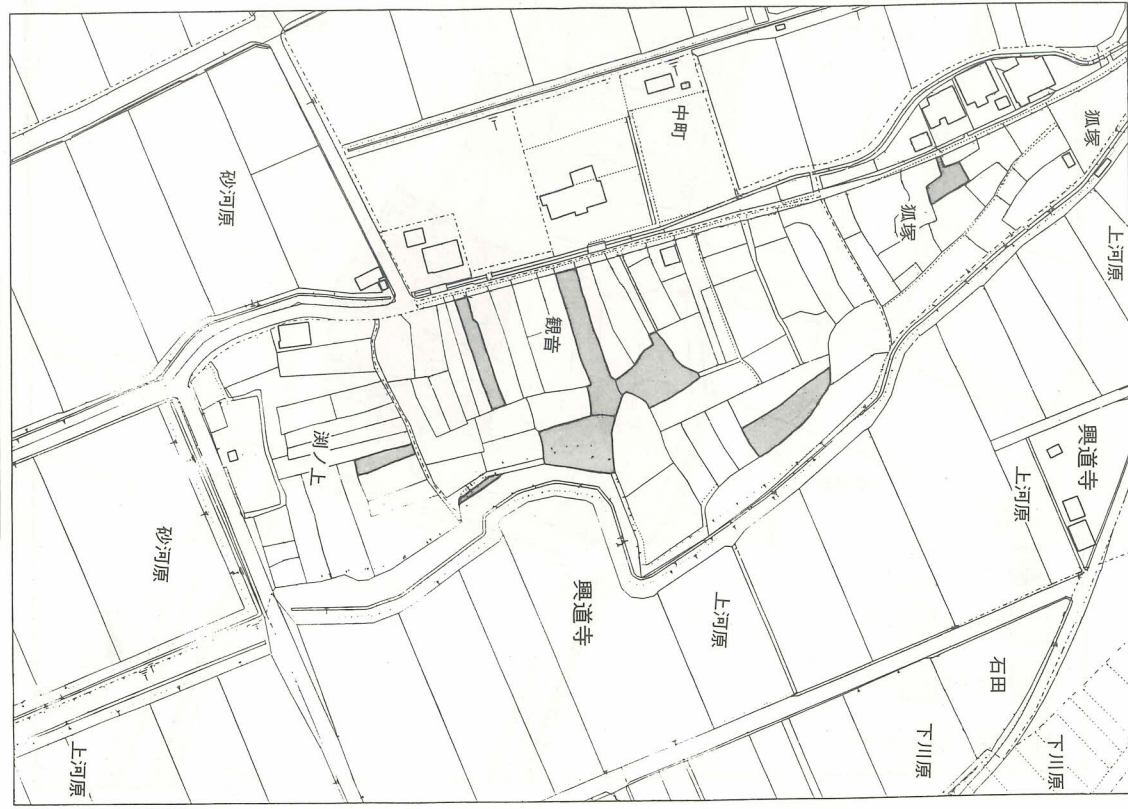
7世紀の遺物分布



第9図 遺物分布調査 遺物分布図1 (S = 1/3,000)

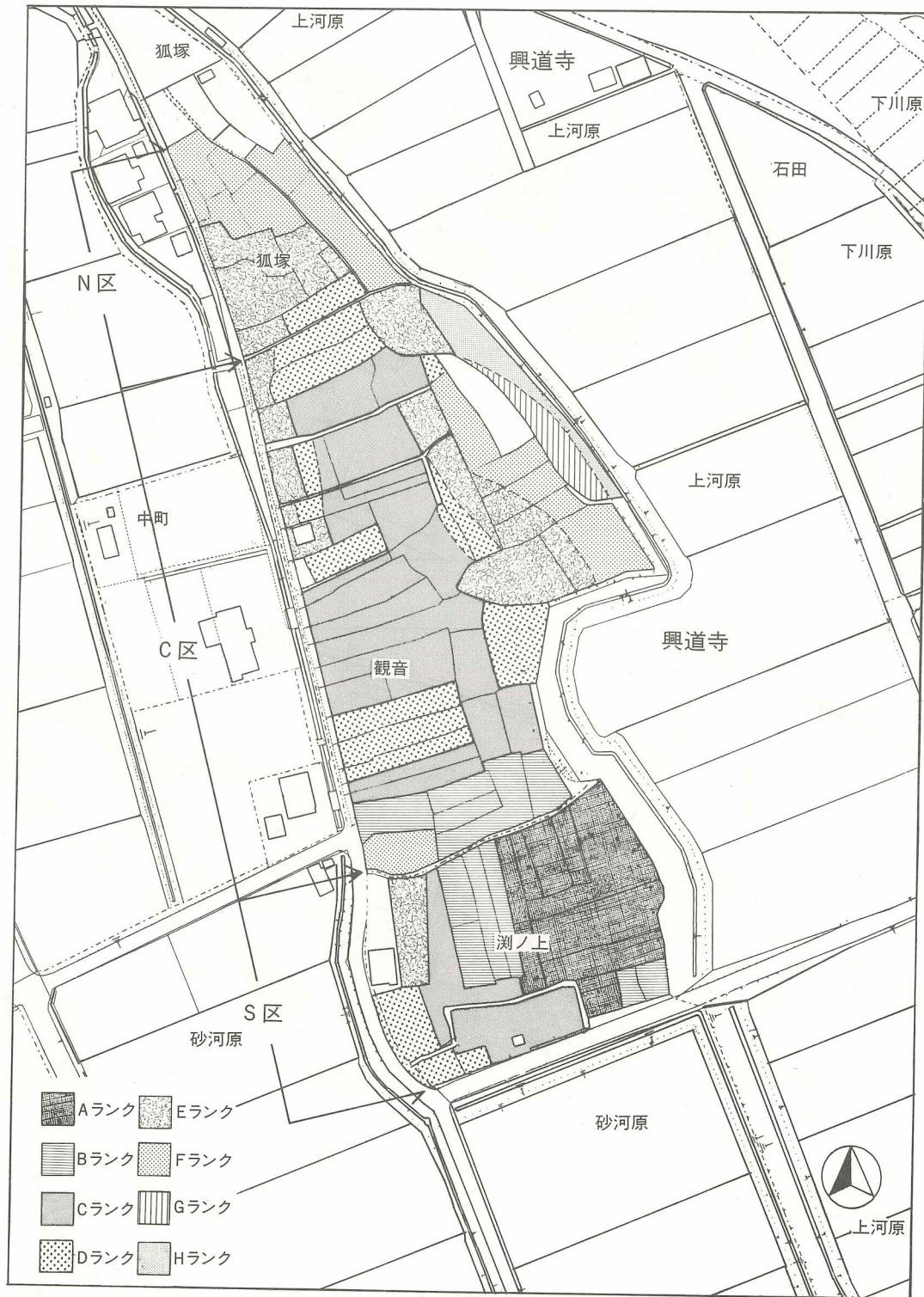


8世紀の遺物分布

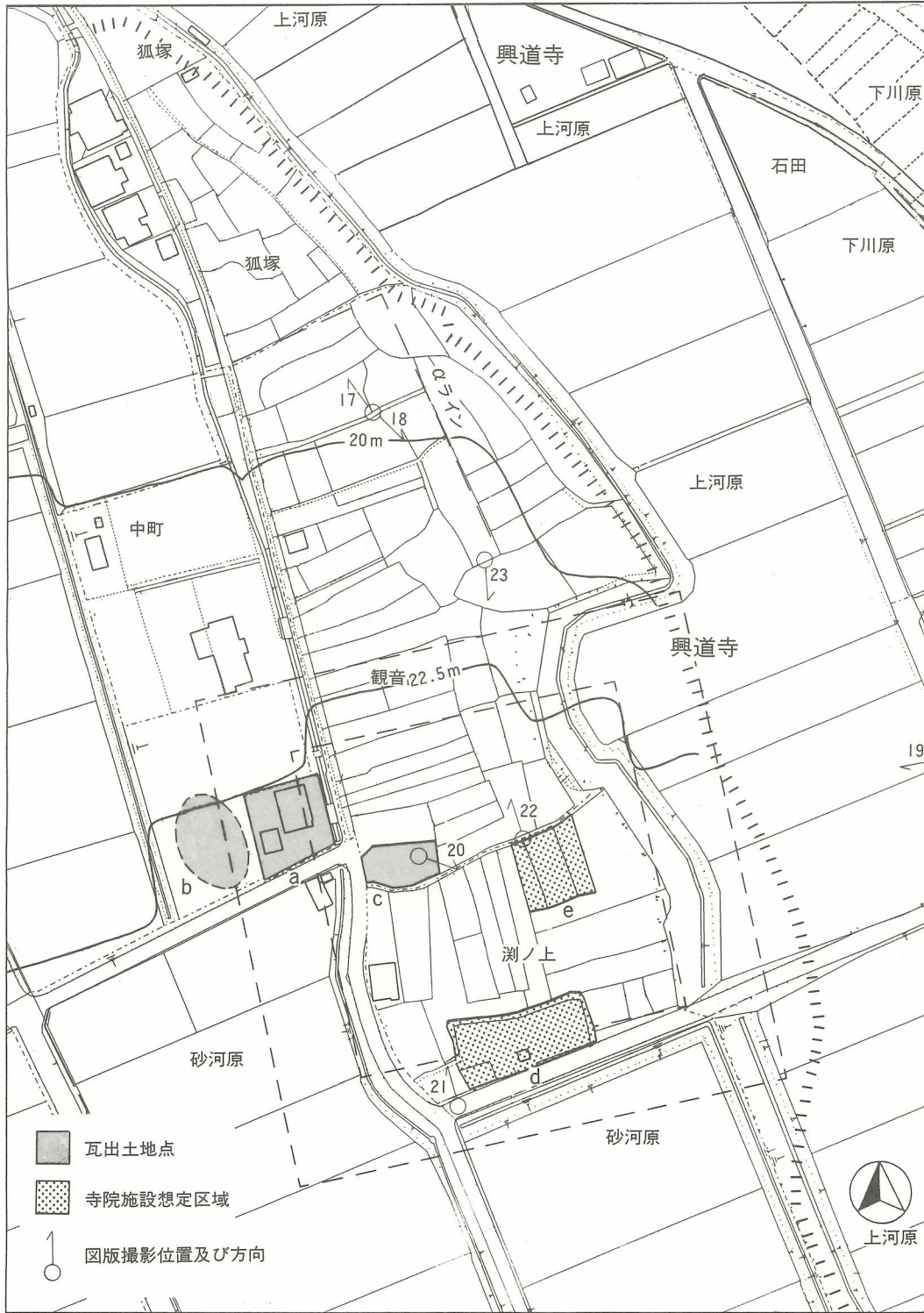


9世紀以降の遺物分布

第10図 遺物分布調査 遺物分布図2 (S = 1/3,000)



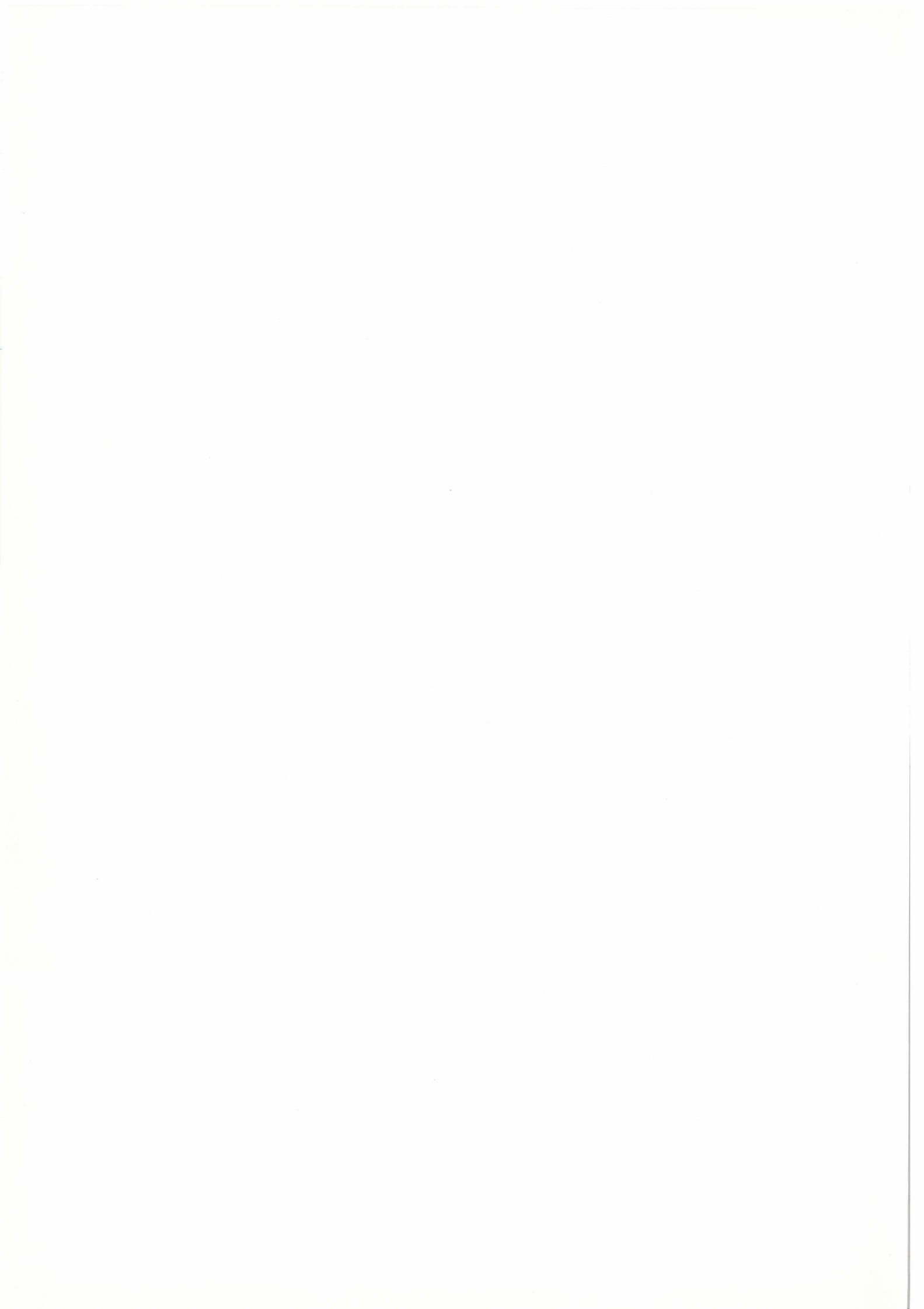
第11図 土地高低区分図(S=1/2,000)



※旧地形図は昭和39年測量、昭和50年・51年修正地形図(国土地理院作製)から一部合成した。

第12図 興道廃寺周辺古環境図(S = 1/2,000)

写 真 图 版





1. 1 トレンチ



2. 2 トレンチ



3. 3 トレンチ



4. 6 トレンチ



5. 4 トレンチ 東半



6. 4 トレンチ 西半



7. 5 トレンチ



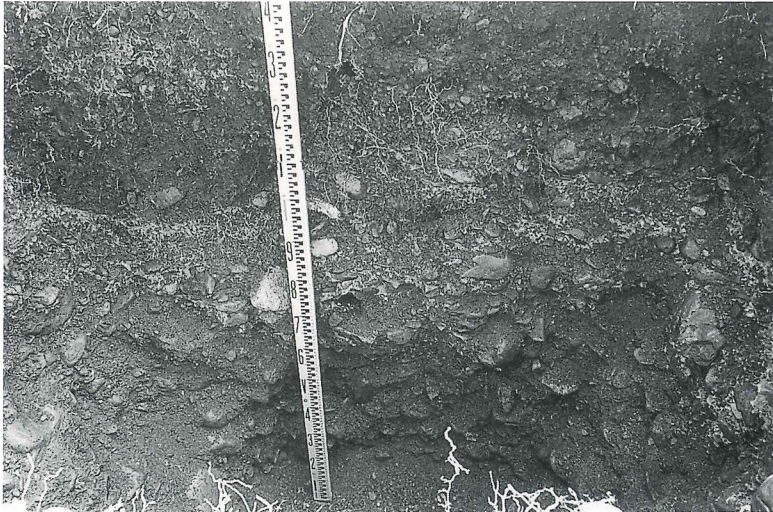
8. 5 トレンチ SDI完掘



9. 5 トレンチ SDI土層



10. 5 トレンチ SDI遺物出土状況



11. 1トレンチ 断ち割り状況



12. 2トレンチ 断ち割り状況



13. 3トレンチ 断ち割り状況



14. 4 トレンチ 断ち割り状況



15. 5 トレンチ 断ち割り状況



16. 6 トレンチ 断ち割り状況



17. N区 (NW)



18. C区中央東端部 (SE)



19. C~S区東端段丘崖 (W)



20. S区南東端最高位地点 (SE)



21. S区 (N)



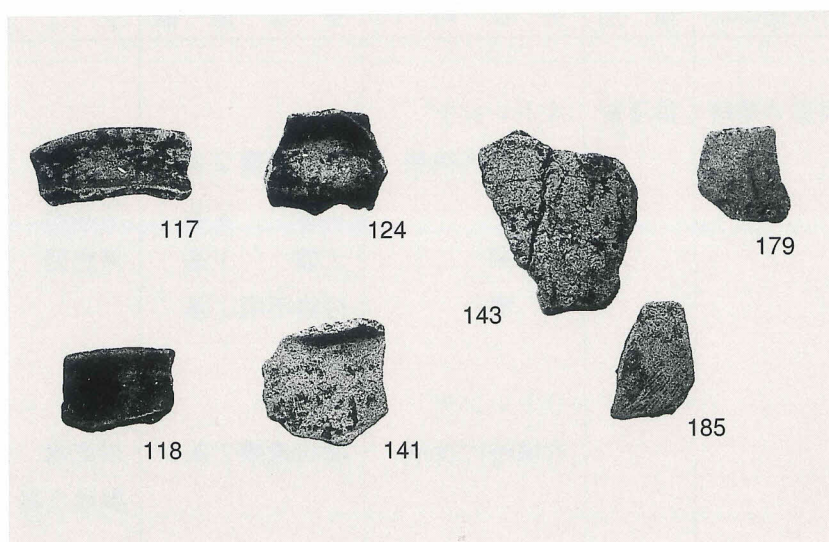
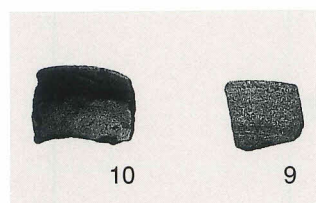
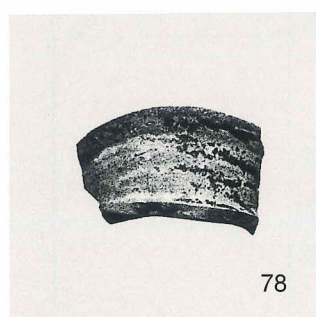
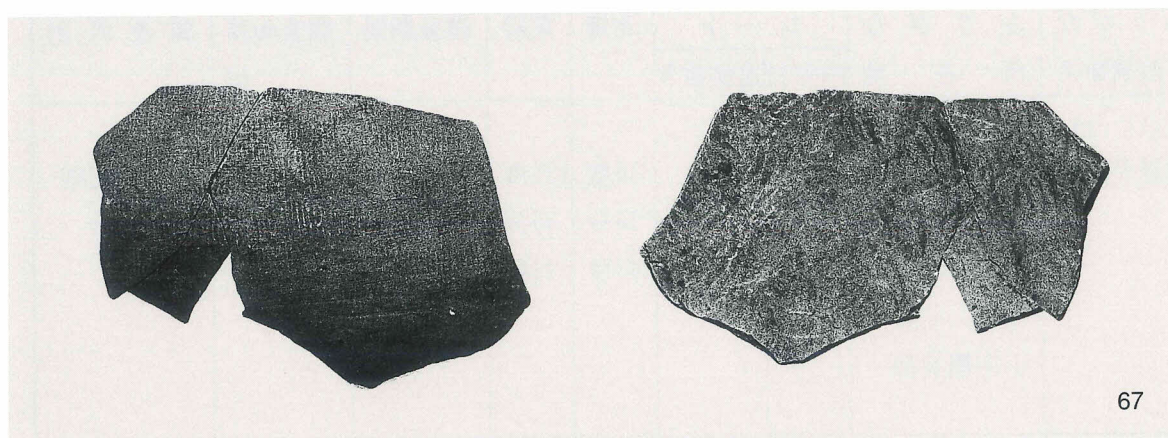
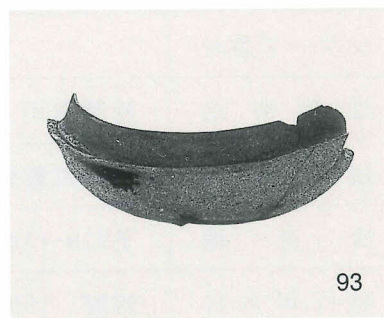
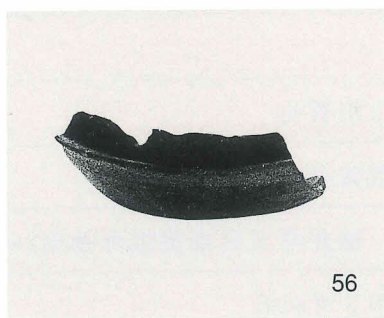
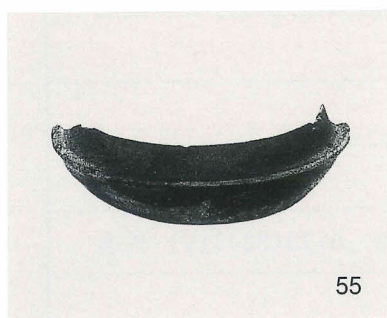
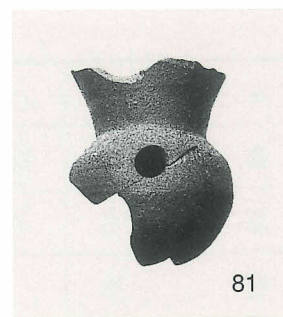
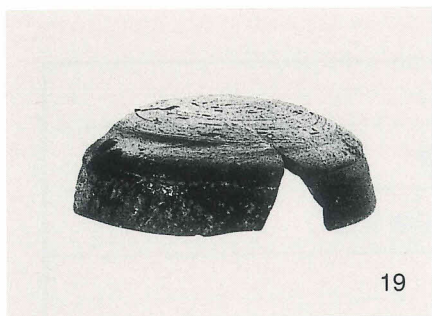
22. C区 (N)



23. C区石垣 (S)



24. 作業風景



報告書抄録

ふりがな	ふくいけん みはまちょうまいどうぶんかざい はつくつちようさほうこくしよ
書名	福井県美浜町埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	平成10年度興道廃寺範囲確認試掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	福井県美浜町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	松葉竜司、上田智也
編集機関	美浜町教育委員会
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25-25 0770(32)1111 代表
発行年月日	西暦 1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうどうじ いせき 興道寺遺跡	ふくいけん みかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺 こあざ かのんほか 小字観音他			35度 35分 48秒	135度 56分 49秒	980816～ 990331	約77,52	寺域範囲確認による。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興道寺遺跡	集落跡	4トレンチ 古墳時代後期 平安期 不明	溝状遺構 2基 土壇 2基 土壇 1基 性格不明 1基	須恵器、土師器 須恵器、土師器 須恵器、土師器	
		5トレンチ 古墳時代後期	溝状遺構 1基	須恵器、土師器 製塩土器	

(1999年3月31日発行)
福井県美浜町埋蔵文化財発掘調査報告書

「平成10年度興道廃寺範囲確認
試掘調査報告書」

発行 美浜町教育委員会
〒919-1192
福井県三方郡美浜町郷市25-25
TEL 0770-32-1111(代)
FAX 0770-32-1115

印刷 若越印刷株式会社
〒914-0037
福井県敦賀市道口63-10-1
TEL 0770-22-5600(代)
FAX 0770-23-2288

この電子書籍は、1999年3月31日、美浜町教育委員会が発行した『平成10年度興道廃寺範囲確認試掘調査報告書』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：平成10年度興道廃寺範囲確認試掘調査報告書

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日